

伊豆大島噴火に伴う磁気測量

植田義夫*・中川久穂**・小野寺健英**・長屋好治**・熊川浩一**・朝尾紀幸***

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

Yoshio Ueda*, Hisaho Nakagawa**, Kenei Onodera**, Yoshiharu Nagaya**
Koichi Kumagawa** & Toshiyuki Asao***

Abstract

Hydrographic Department, M. S. A. Japan conducted airborne/land magnetic survey on Osima island to investigate magnetic structure and their magnetic change accompanied by volcanic activity after eruption on Nov. 1986.

In airborne magnetic survey, total intensity was measured by proton precession magnetometer every two seconds. Positions just over island were fixed using video image, and that over sea were determined by VLF/OMEGA positioning system. Positioning error over island was assumed less than 100m in the usual condition. Detailed magnetic anomaly maps were made based on above survey data as shown in this report. These magnetic anomaly maps may play an important role for future study of magnetism of Osima volcano accompanied by volcanic activity.

Using the above survey data, three dimensional magnetic analysis were conducted by Talwanis method. These results show that magnetization vector of Mt. Mihara become nearly half of that of Osima volcanic edifice, which may imply thermal demagnetization process of Mt. Mihara. The total intensity field derived by magnetic survey in Dec, 1986 were also compared with that in Sept 1964, which were reported by Utashiro et al. (1972) to obtain magnetic change for these 22 years. This comparison shows drastic magnetic decrease amounting more than 1000nT near Mt. Mihara, although there still remain some problems to confirm such a large amount of magnetic change. In addition, some model calculations on thermal demagnetization were shown for interpretation of magnetic change accompanied by volcanic activity.

Twice of Land magnetic survey were conducted, First one was from Jan 26 to Feb 2, 1987 and second from Mar 2 to Mar 6, 1986. Vector component of magnetic field were measured by GSI first order magnetometer and proton magnetometer at three station, SO (near weather observatory), FU (near Mt. Futago), UR (eastern slope of Osima island), besides total intensity were measured at five

Received 1 August 1987.

* 企画課 Planning Division

** 航法測地課 Geodesy and Geophysics Division

*** 白浜水路観測所 Shirahama Hydrographic Observatory

points within caldera-rim. No distinctive magnetic change were observed between two land magnetic surveys, however comparison with magnetic contour map made by Yokoyama I. (1954) show a large amount of change at FU station.

1. はじめに

伊豆大島は玄武岩質の熔岩と降下火碎物で構成される代表的な活火山で、歴史的にも100～150年を周期に大噴火をくり返している。1777年から1792年にかけての安永の噴火では総計6.6億トンもの火山噴出物を放出している。大島のような磁性の強い玄武岩質の火山では噴火に伴う地磁気変化が古くから報告されている。1950年から1951年にかけての噴火活動期には、陸上での地磁気測量が力武や横山ら(Rikitake, 1951; Rikitake & yokoyama, 1955)により実施され、2ヶ月の間で伏角が全島にわたり最大25°減少したことが報告されている。また、伊豆大島西岸の野増観測所では、三成分連続変化観測が実施され、噴火に先行して偏角が西偏することが、Yokoyama (1957), Yokoyama (1969) により明らかにされた。このように、1950年～1951年の噴火活動期には、地磁気変化量は最大200～300nTに達しており、このような地磁気変化をもたらす熱消磁モデルも、Rikitake (1951), Uyeda (1961) 等により出されている。

同島の航空磁気測量は、1960年代半ばに「上部マントル計画」の一環として海上保安庁水路部や東北大学により実施された。このうち水路部によるものは、1964年9月に高度3000ftでヘリコプターを使って実施したもので、それによると同島の地磁気全磁力異常は2500nT以上に及ぶものであることが確認された(Utashiro et al, 1972)。

1986年11月の噴火では総計約5000万トンの噴出物が放出されている。この量は前回の1950年～1951年の噴出時(約4000万トン)の量よりも多く、活動の推移に伴う地磁気変化がどの程度のものかということは、非常に興味の持たれる点である。海上保安庁水路部では昨年11月の噴火後(12月5日)から同島の航空磁気測量をくり返し実施し、火山活動期における同島の精密な磁気図を作成するとともに噴火後の地磁気変化の監視に努めた。また航空磁気測量の結果を補足し、陸上での地磁気変化を検出するため、島内移動観測も実施した。本報告では、これらの測量の概要を紹介するとともに、それらの資料にもとづく若干の考察結果を述べる。

2. 磁気測量の概要

2-1 航空磁気測量

昭和61年伊豆大島噴火に係る伊豆大島総合調査の一環として1986年12月5日を第1回目として1987年3月18日までの延べ7回にわたり伊豆大島の航空磁気測量を実施した。この間の測量日時、飛行高度、コース、及び測量班の構成を第1表にまとめた。

航空磁気測量は、海上保安庁所属 LA701型機(YS-11)により実施した。プロトン磁力計はバリンジャーGM123型磁力計を用い約2秒毎に全磁力値を計測した。センサーは、機体磁気雑音の影響を防ぐため、機体尾部からのびた Tail Stinger 内に設置した。飛行機の位置は、陸上部についてはビデオ映像と対地写真の比較により決定した。この方法による測位誤差は較差点での全磁力値差などから推定し、±100m以内に収まるものと考えられる。海上部分の測量では、オメガ測位値を参考にし、陸上部との接続を考察して測位値の補正を行った。

1986年12月5日、17日の測量では、同島上空3000ftの磁気図を作成すること目的とし、測線を南北方向

Table 1 Summary of airborne magnetic survey from Dec 5, 1986 to Mar. 19, 1987.

	測量年月	飛行コース	飛行高度(ft)	測量班
1	1986年12月 5日	大島上空精査 海域部測量	3,000 3,500	植田, 中川, 長屋
2	12月17日	大島上空捕測 照査線 〃 〃	3,000 1,000 3,500 4,000	朝尾, 中川, 小野寺
3	12月24日	照査線 〃 〃 〃	3,000 3,500 4,000 5,000	植田, 朝尾, 長屋
4	1987年 1月19日	大島周辺海域部 及び照査線	3,000	朝尾, 小野寺, 長屋
5	1月20日	大島上空精査	4,000	朝尾, 小野寺, 長屋
6	3月17日	照査線 大島上空精査	3,000 6,000	中川, 松本, 白井
7	3月18日	補測 大島周辺海域部	6,000 4,000	中川, 松本, 白井

に設定した。この二回にわたる測量により、伊豆大島上空については平均0.2~0.3マイル間隔の測線にもとづく精密な磁気図を作成することが可能となった。17日の測量翌日には、三原山のA火口で小規模な噴火が発生した。このため、火口周辺を南北に縦断する測線は危険であるとのことで、この日以降は伊豆大島をNE-SWに横断する照査線を設定し、その測線に沿ってくり返し測量を行うことにした。1987年1月19日、20日の測量では、照査線の測量及び大島周辺の海域部において3000ftの測量を実施するとともに、高度4000ftにおける測量を行った。3月17日、18日の測量では、同じく高度4000ftにおける測量と、山頂上空を南北に縦断する高度6000ftの測量を実施した。

2-2 島内移動観測

伊豆大島の噴火後における地磁気変化を検出し、航空磁気測量データを補足する見地から、1987年1月下旬、及び1987年3月上旬において、伊豆大島島内移動観測を実施した。観測点は、地震研究所の地磁気観測点に近接した島内3ヶ所（測候所、裏砂漠、二子山）及びカルデラ内の1ヶ所の計4地点で、カルデラ内の測点については標石を設置した。前者の3測点ではGSI型磁気儀及び携帯プロトン磁力計により、偏角、伏角、全磁力の測定を行った。カルデラ内の標石点では携帯プロトン磁力計による全磁力測定を行った。

カルデラ内については、三原山、西北西斜面から山麓部へいたる4地点に木杭を設置し、全磁力を測定した。各測点の位置は、1/5,000地形図（地理院による）上で、顕著な目標物をもとに六分儀で決定した。なお、カルデラ内の調査にあたっては伊豆大島火山観測所との連絡を密にし、安全確保に努めた。

3. 航空磁気測量

3-1 伊豆大島の地磁気異常と磁気的構造

(1) 地磁気異常図の作成

航空磁気測量期間中の外部磁場変化の補正是、伊豆大島火山観測所、野増測点における全磁力連続記録をもとに行なった。全般的に測量期間中の外部磁場変化は静穏であり、最大でもK指数は2である。

資料整理の過程では、日変化補正とともに機体磁気補正が必要である。機体磁気雑音の測定は、潮岬VORの上空を8方位に飛行して測定し、その方位依存性を求めた。その結果、機体磁気雑音の振幅は78nT、方位152°, 332°で最大、最小となる。磁気異常の計算にはIAGAの勧告にもとづき、IGRF1985モデルを用いた。

(2) 地磁気異常の特徴

第1図は'86年12月5日、17日の測量結果をもとに作成した伊豆大島上空3000ftの全磁力異常図である。第2図は、第1回目('86年12月5日、第1表)から第4回までの測量結果をもとに作成した大島とその周辺海域の高度3000ftにおける全磁力異常図である。第1図の異常図では、三原山付近からSE方向に200nT以上の顕著な正異常域が延びている様子がわかる。また、まゆ状の外輪山の高まりに対応して高異常域がつらなり、北部外輪山付近では1000nT以上の正異常値を示す。大島北東部の峰の尻付近から三原山北側のカルデラ床にかけては、等值線がわん入しており、磁気的に300~400nTの凹部となっている。第2図の海域部を含めた磁気異常図では、第1図に見られた三原山付近から南東へ延びる正異常帯が、さらに海域部の波浮海脚付近にまで延びている様子がわかる。また、岡田港の北約2マイル付近には+300nTの正異常域が認められる。この異常域はさらに東へ延び、相模トラフに沈み込みつつある海丘の正異常と連続する。

第2-1図a~cに沿う地磁気異常と地形の断面を第3図(a)~(c)にそれぞれ示した。aのN-S断面では、伊豆大島の地形の高まりが相模湾の水深1500mの海底から急傾斜で盛り上がり、山体の基底部を構成している様子がわかる。しかし、地磁気異常にはこのような地形的影響に伴う特徴は顕著でない。断面bは大島の二子山を通る南西~北東にかけての断面であり、又、断面cは、大島から連続する波浮海脚と同じ方向に切る断面である。両断面の比較から、断面cの異常が、断面bの500~600nT以下の磁気異常曲線とほぼ一致する様子がわかる。このことから、大島の磁気異常は、山体地形に伴う異常と断面Cで示されるほぼ2次元的な配列を有する異常とが重量したものであることが推察される。後者の二次元的な磁気異常の方向は、大島火山の側火口の配列と一致しており、この方向に沿って磁性岩体が深部から貫入しているものと考えられる。なお、各断面に沿う磁気異常による構造解析結果については目下検討中であり、別途、報告する予定である。

第4図は、'87年1月20日及び3月18日の測量結果をもとに作成した高度4000ftの磁気異常図である。測線間隔は1~2マイル間隔であるため、大島上空の短波長異常については必ずしも十分に把えられているとは言えない。しかし、海域部を含めた全体的な磁気異常のパターンは3000ftの場合と調和的である。

(3) 3次元タルワニ法で求めた伊豆大島の磁気的構造

第2図の高度3000ftにおける磁気異常図をもとに、火山活動期における伊豆大島の磁気的構造を求めるため、3次元タルワニ法(Talwani, 1965)にもとづき磁気異常の解析を行なった。具体的な解析方法については、植田ほか、(1983)に述べてあるので参照されたい。

伊豆大島の3次元磁気異常の解析結果については、Vacquier & Uyeda (1967), Kodama & Uyeda (1978), 植田ほか、(1983)で報告されているが、これらの解析結果は1960年代に実施された測量結果にもとづくものであり、火山活動期の磁気的構造を求めるという点からは、今回の解析結果が参考になるものと考えられる。

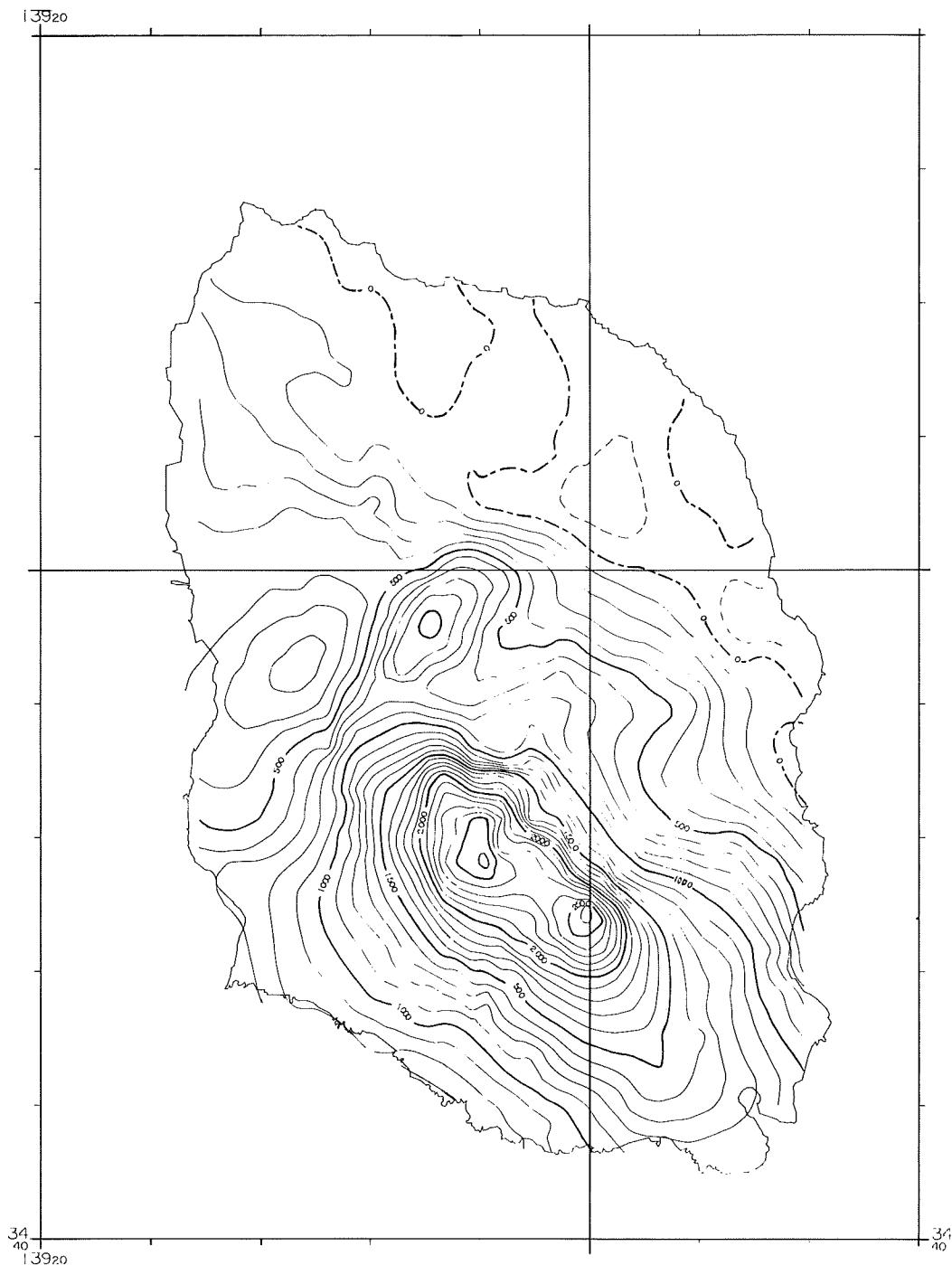


Figure 1 Aeromagnetic anomaly map over Osima Island at height of 3000ft.

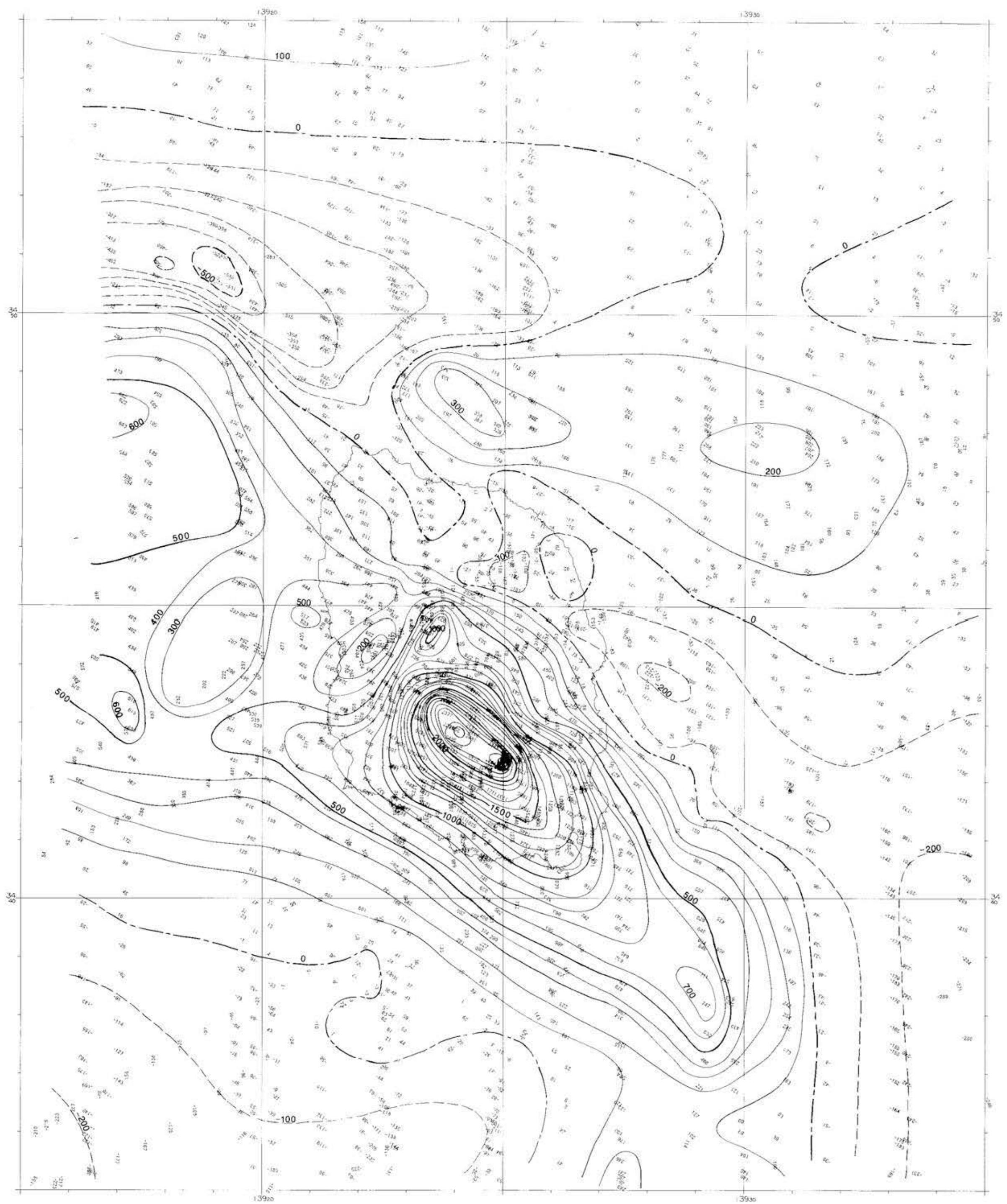


Figure 2 Aeromagnetic anomaly map over Osima Island and its adjacent sea area at height of 3000ft,
survey period : Dec 5, 1986 to Jan 19, 1987. unit in nT. Contour interval is 100nT.

1/50000 (LAT 35 N)

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER
VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

213

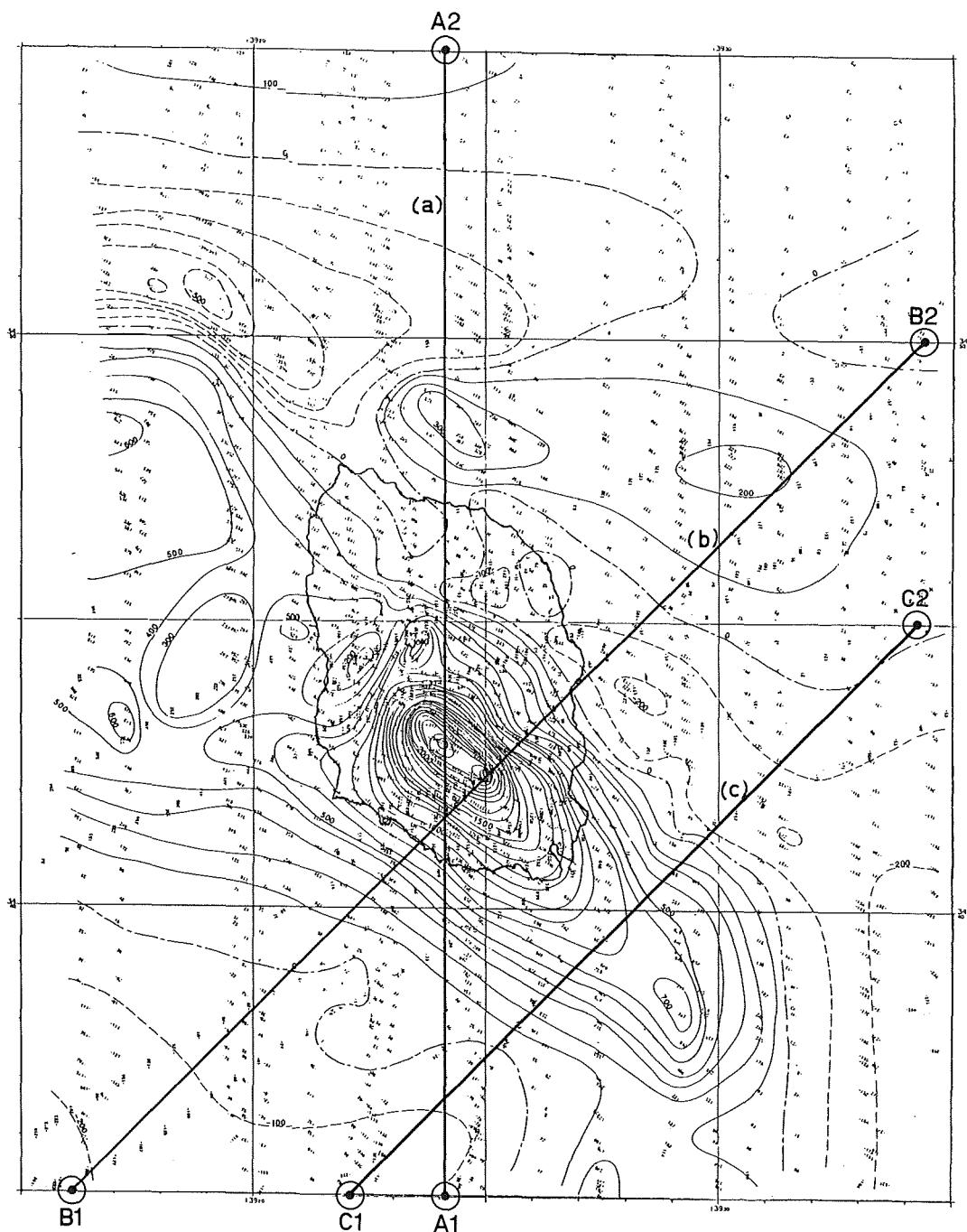


Figure 2-1 Aeromagnetic anomaly map over Osima Island and its adjacent sea area at height of 3000ft.
survey period : Dec 5, 1986 to Jan 19, 1987. unit in nT. Contour interval is 100nT.

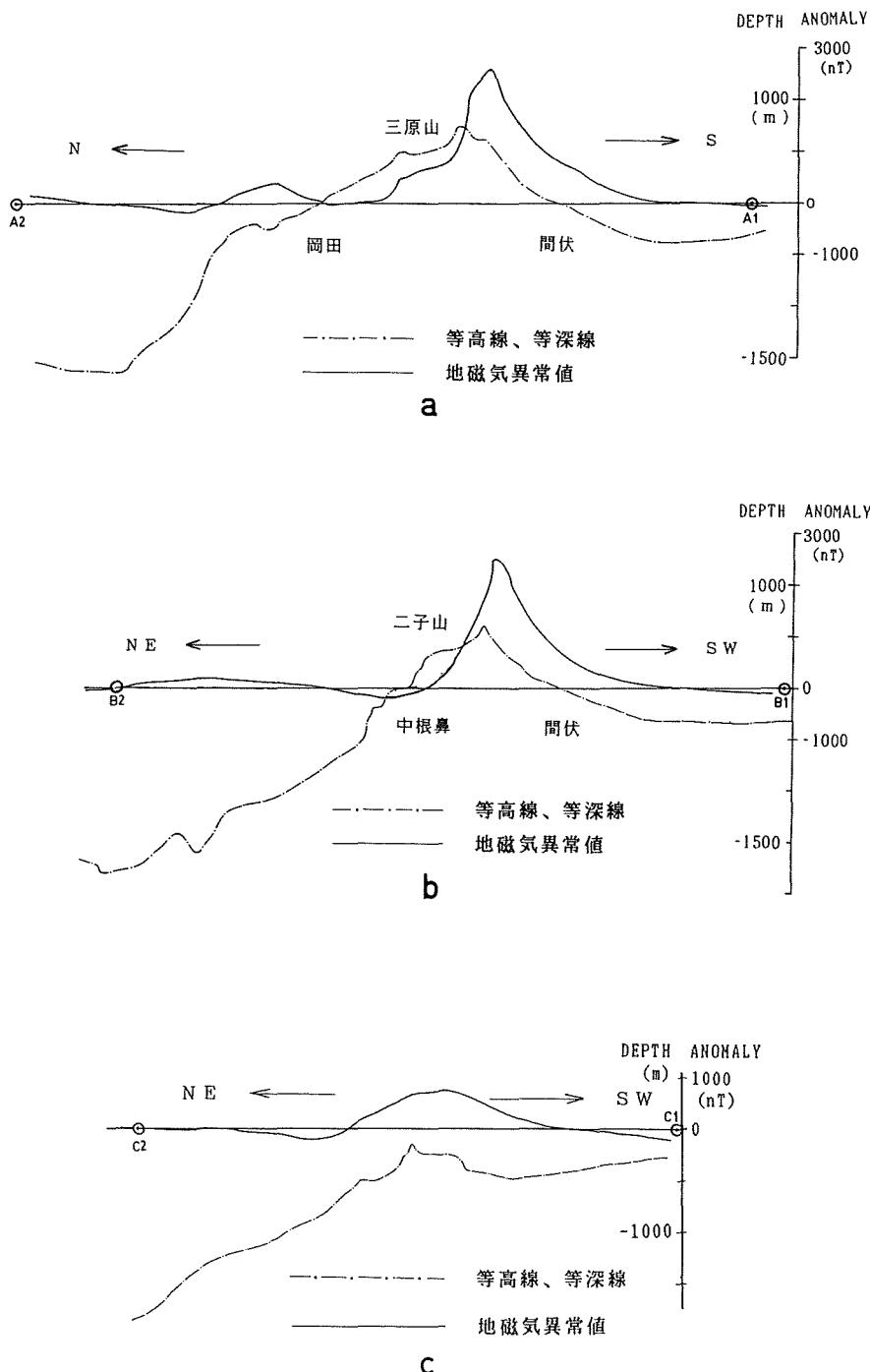


Figure 3 Magnetic anomaly profiles and their corresponding topographic cross section.
 (a) N-S profile running over Mt. Mihara.
 (b) SW-NE profile running over the summit of Mt. Futago.
 (c) SW-NE profile running over Habu spur.

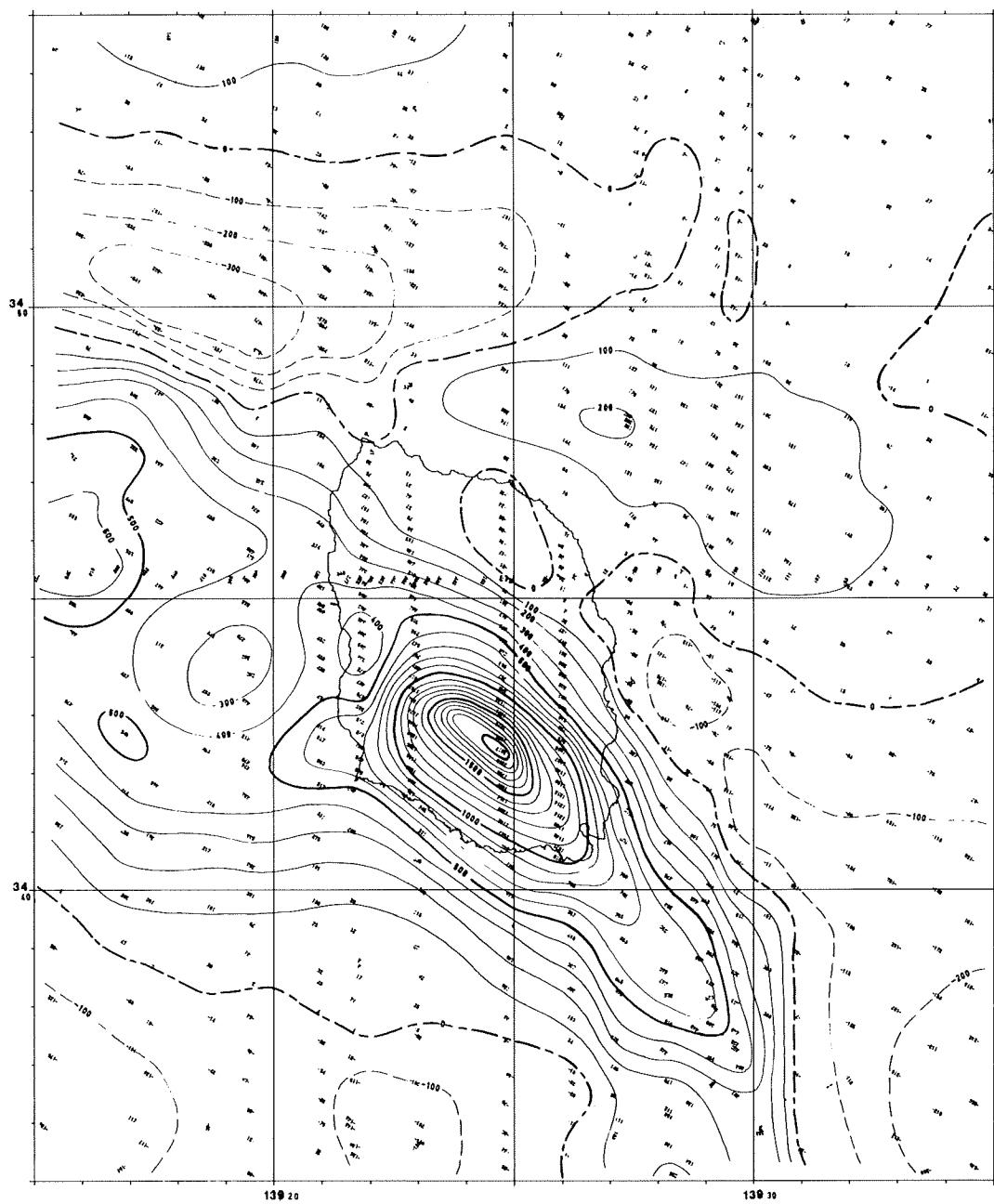


Figure 4 Aeromagnetic anomaly map over Oshima Island and its adjacent sea area at height of 4000ft.

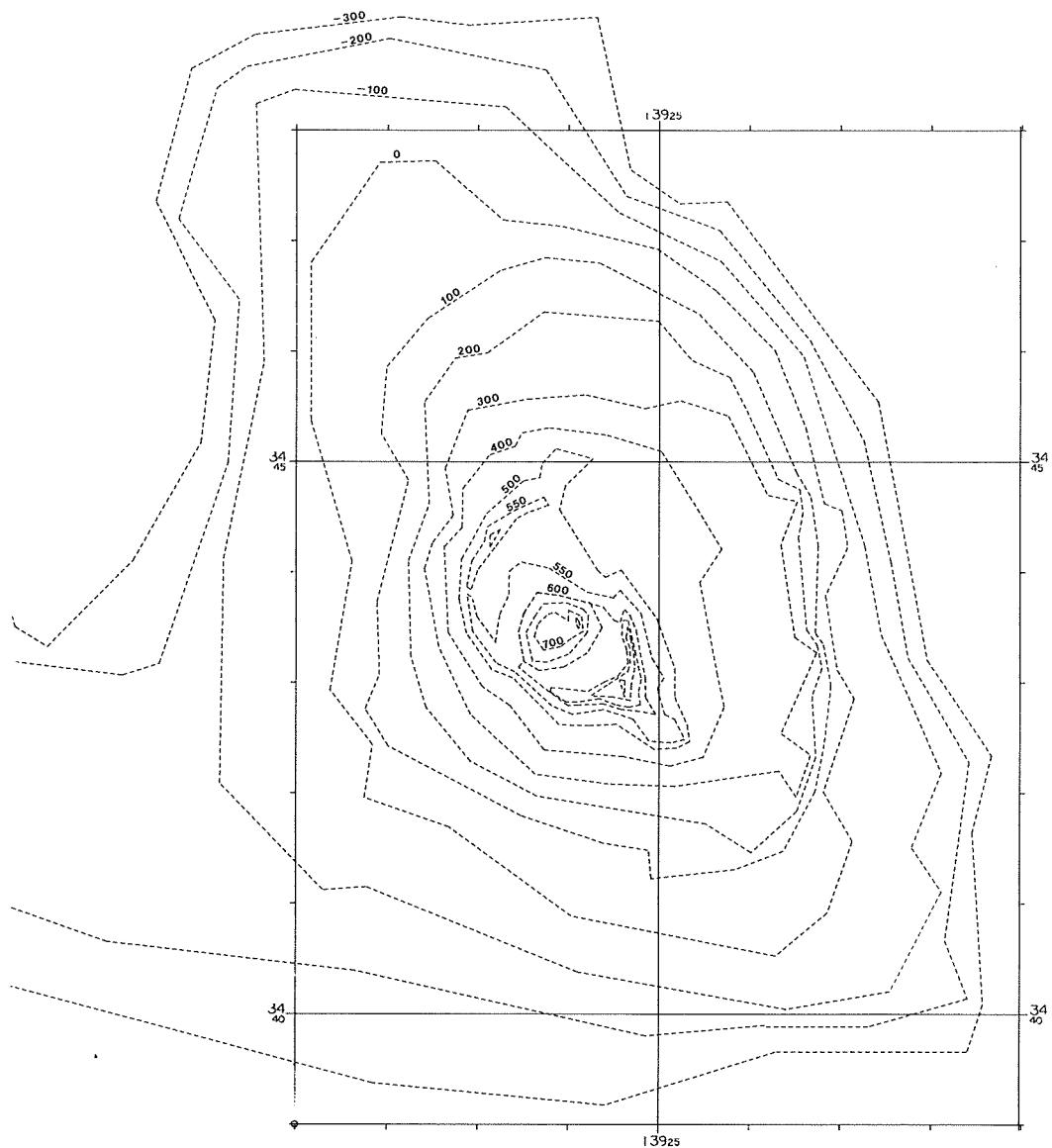


Figure 5 Results of three dimensional analysis on aeromagnetic anomaly measured at height of 3000ft above sea level.

(a) Approximated polygonal topography used in analysis

解析にあたっては外輪山及び標高600m以下の等高線で代表される大島の山体基盤と、カルデラ内の三原山のそれぞれの地形を多角形で近似し、第5図(a)に示すモデルをもとに解析を行った。また、高度3000ftの磁気異常を4000ft、6000ftに上方接続し、それらについても3000ftと同様の方法で解析を行った。

磁気異常の解析にあたっては、磁化方向と磁気モーメントを同時に求める場合（モード1）と、磁化方向をほぼ現在の磁場方向（Dec = 0°, Inc = 47°）と仮定し、各モデルの磁気モーメントを求める場合（モード2）の二つの方法で解析を行った。また、大島基盤の基底深度については、地形的には水深300m付近であるが、ここでは300mと500mの2つの場合について計算した。第2表は各モデルにもとづく解析結果をとりま

とめたものである。表中、モデル1～モデル4は3000ftの解析結果、モデル5,6は4000ft、モデル7,8は6000ftの解析結果である。モデル1,3は、大島基盤の基底深度を水深300mと500mにした場合の結果である。解析精度を表すG-指数については(Uyeda & Richard, 1966)、モデル3(基底深度-500m)の方が大きいが、残差平均値(Res)や標準偏差 σ では、モデル1(基底深度-300m)の方が良い。また、各変数の推定誤差を示すSDm,SDaについては、モデル1の方が全体的に小さくなっている。これらのことから判断して、大島の磁気基盤は、基本的には、地形的な基底深度である水深300m付近に一致するものと推定される。モデル1の解析結果では、大島基盤の磁化は、 $|J|=12.4\text{A/m}$, $\text{Dec}=25.4^\circ$, $\text{Inc}=61.4^\circ$, 三原山が $|J|=6.7\text{A/m}$, $\text{Dec}=2.8^\circ$, $\text{Inc}=65.9^\circ$ の値となり、三原山の磁化強度が、大島山体基盤のそれに比べ約半分近い値となっていることがわかる。このような結果は、山体の磁化方向を現在の外部磁場方向に固定した場合(モード2)にも同じような結果が得られており(第2表、モデル2, モデル4), 三原山が熱消磁により磁化が減少している可能性を示唆するものとして興味深い。

Table 2 Results of three dimensional magnetic analysis on Osima island.

Model	Model description			Flight level	Decli	Incli	Magnetization	Vector Intensity	SDm	G-ratio	Res	σ
	Base	&	Top	(m)	(°)	(°)	SDa (°)	k/m	A/m			
1	Osima	-300	600	909	25.4	61.4	1.97	12.35	0.425	3.13	160.0	200.5
	Mihara	600	750		2.8	65.9	17.29	6.70	2.02			
2	Osima	-300	600	909	present direction		1.55	14.17	0.38	2.86	183.5	232.4
	Mihara	600	750				16.48	6.46	1.86			
3	Osima	-500	600	909	33.4	59.6	2.09	12.36	0.45	3.55	166.0	211.6
	Mihara	600	750		-1.4	67.3	17.50	6.98	2.13			
4	Osima	-500	600	909	present direction		1.65	14.19	0.41	3.17	193.5	244.5
	Mihara	600	750				16.73	6.69	1.96			
5	Osima	-300	600	1212	21.4	58.2	1.54	12.90	0.35	4.24	105.8	130.2
	Mihara	600	750		268.1	58.2	13.56	14.42	3.41			
6	Osima	-500	600	1212	28.4	56.9	1.69	12.84	0.38	4.71	113.4	141.8
	Mihara	600	750		-88.3	57.9	13.52	15.72	3.71			
7	Osima	-300	600	1818	18.9	56.5	1.35	12.80	0.30	5.85	60.1	76.1
	Mihara	600	750		263.0	53.7	14.19	30.10	7.45			
8	Osima	-500	600	1818	25.7	55.9	1.54	12.48	0.34	6.24	67.0	85.6
	Mihara	600	750		-78.7	57.5	13.47	35.40	8.32			

Present direction ; Decli= 0°, Incli=47.2°

第5図には、モデル1の場合の入力異常図(磁気異常値から1次平面トレンドを除去したもの)、計算異常図、及び残差分布図(入力異常値-計算異常値)を示した。残差分布図からは、(1)大島の中央部をNW-SE方向に沿って正の残差域が延びている、(2)大島東側斜面と南西部に負の残差域が分布する、(3)カルデラ内に+500nTに達する顕著な正の残差域が分布する、等の特徴が認められる。このうち、(2)については、大島東側斜面下に古期筆島火山の山体が広がっており、この影響によるものと考えられている(Kodama & Uyeda, 1978)。一方、(1)で述べた特徴は、大島の磁気異常がモデル地形で計算した値よりも短波長成分に卓越していることを意味しており、大島山体の中央部をNW-SE方向に沿って、周囲より磁化の強い岩脈状の岩体が分布していることを示唆する。又、(3)に述べたように、カルデラ内に認められる500nTに達する正の残差域は、カルデラ床内に形成された磁化の強い熔岩層の影響ではないかと推察される。

高度4000ft, 6000ftについての解析も3000ftの場合と同じ方法で実施した。その結果は第2表モデル5～8に示した。第6図、第7図には、上方接続した磁気異常図、入力異常図、計算異常図、残差分布図を示した。

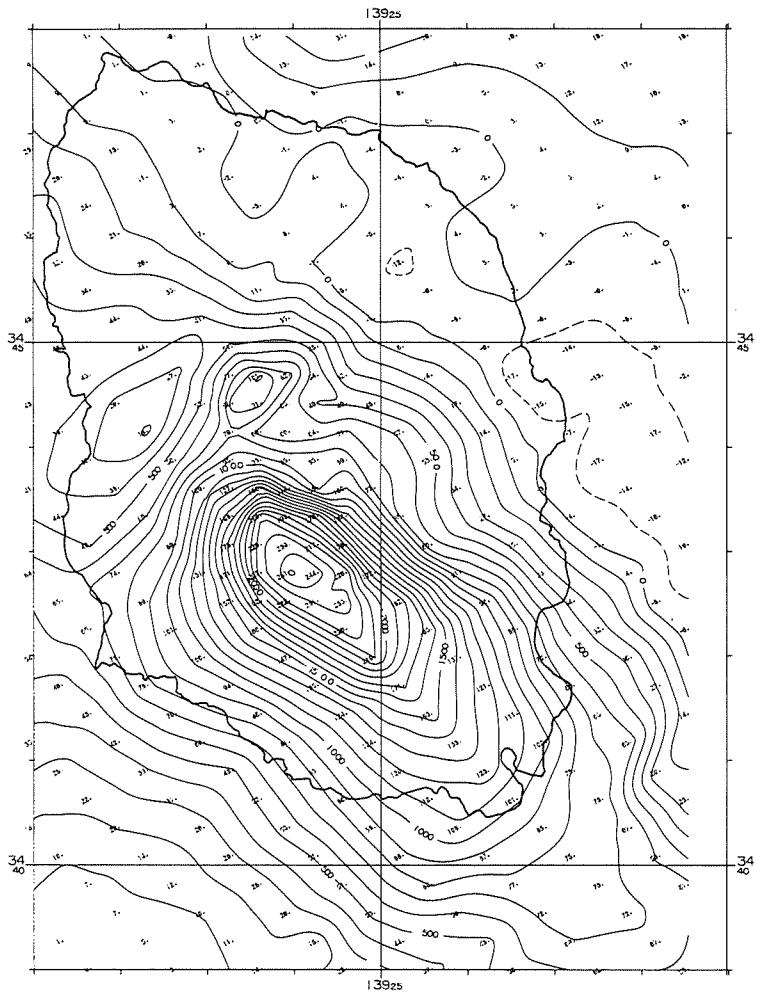


Figure 5 (b) Magnetic anomaly field at 3000ft used for analysis

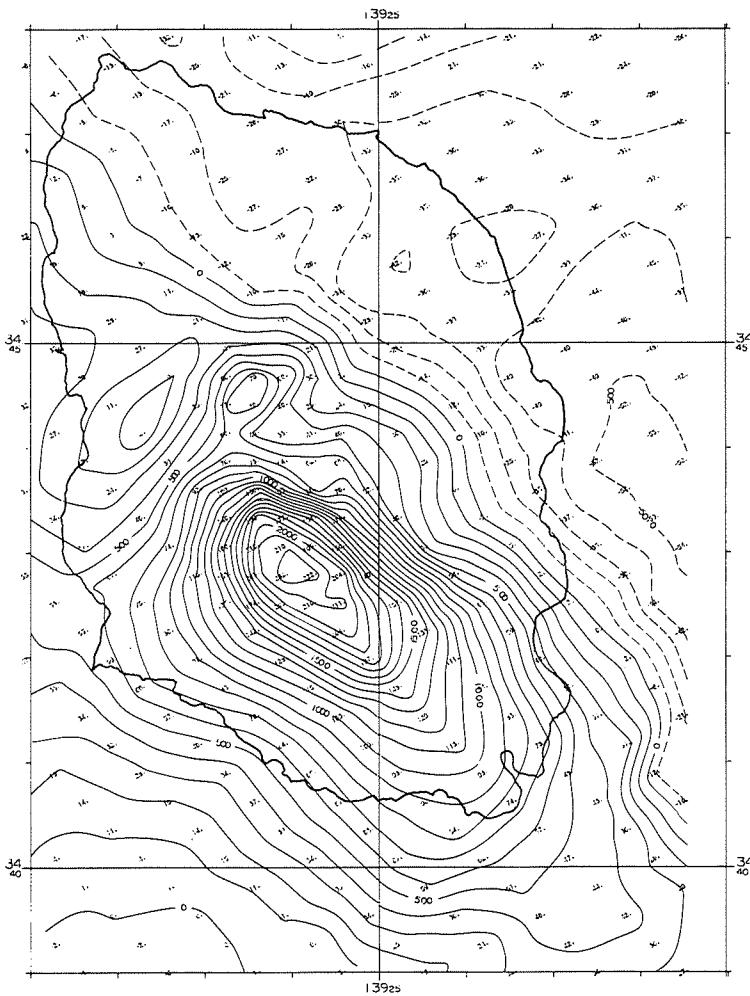


Figure 5 (c) Input anomaly field, which is derived by reduction of self calculated planar trend from observed magnetic anomaly field shown in (b)

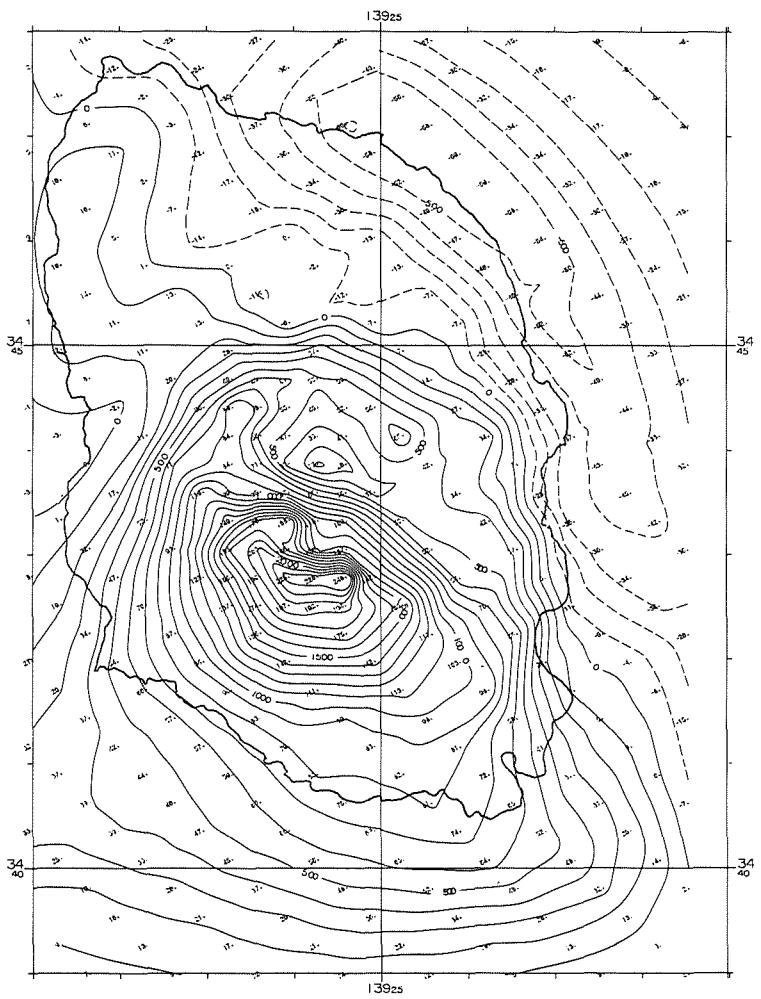


Figure 5 (d) Calculated anomaly field

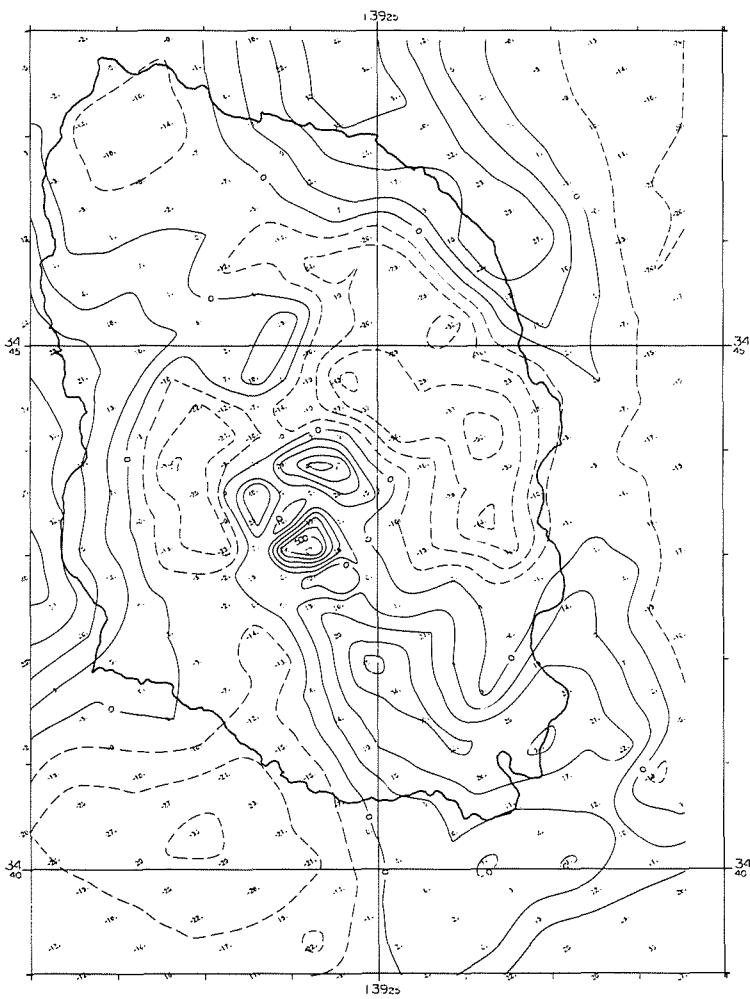


Figure 5 (e) Residual field, which is obtained by (c)-(d)

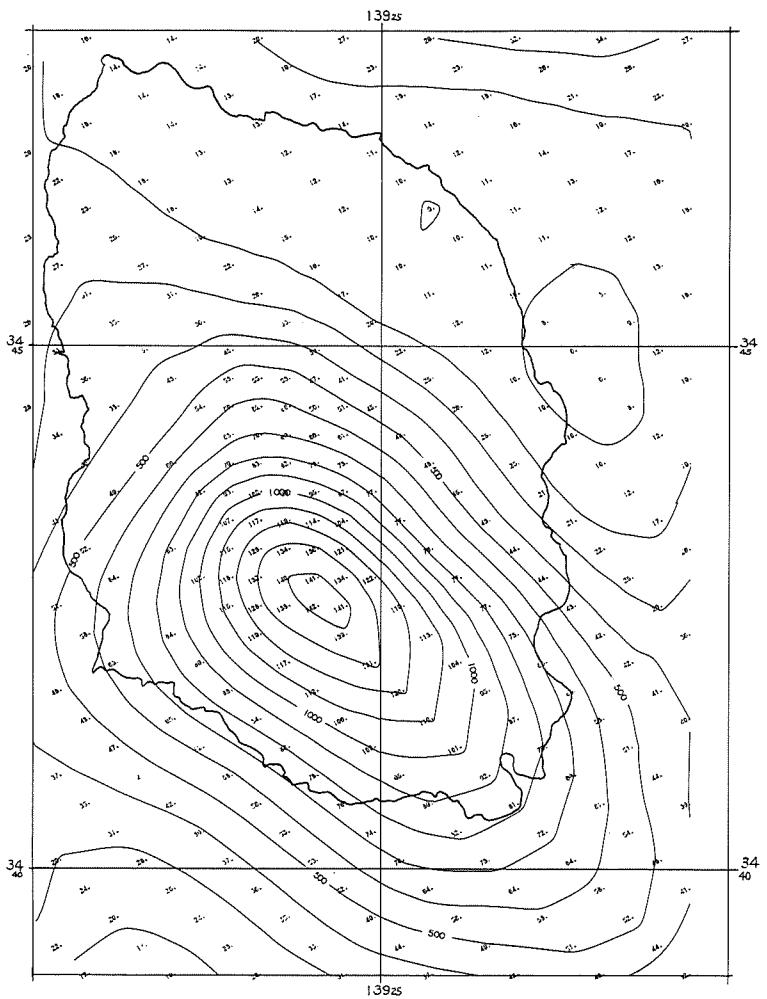


Figure 6 Results of three dimensional analysis on upward continued anomaly at 4000ft as shown in model 5 in Table 2.

(a) Upward continued magnetic anomaly at 4000ft, whose source field is shown in Fig. 5 (b)

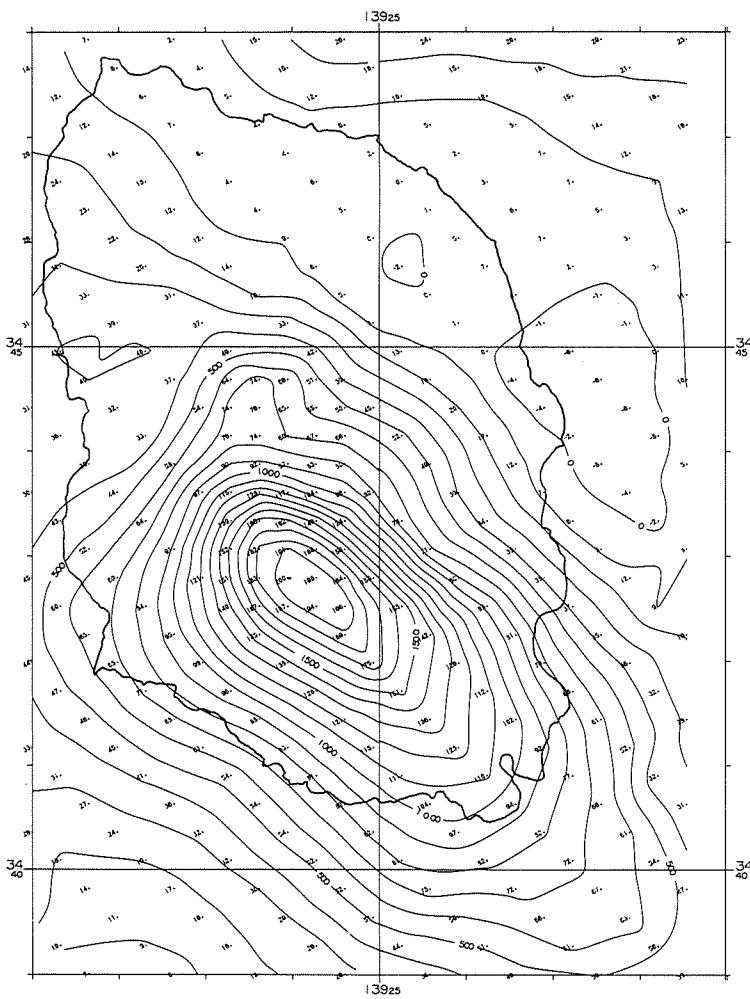


Figure 6 (b) Input anomaly field

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER
VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

221

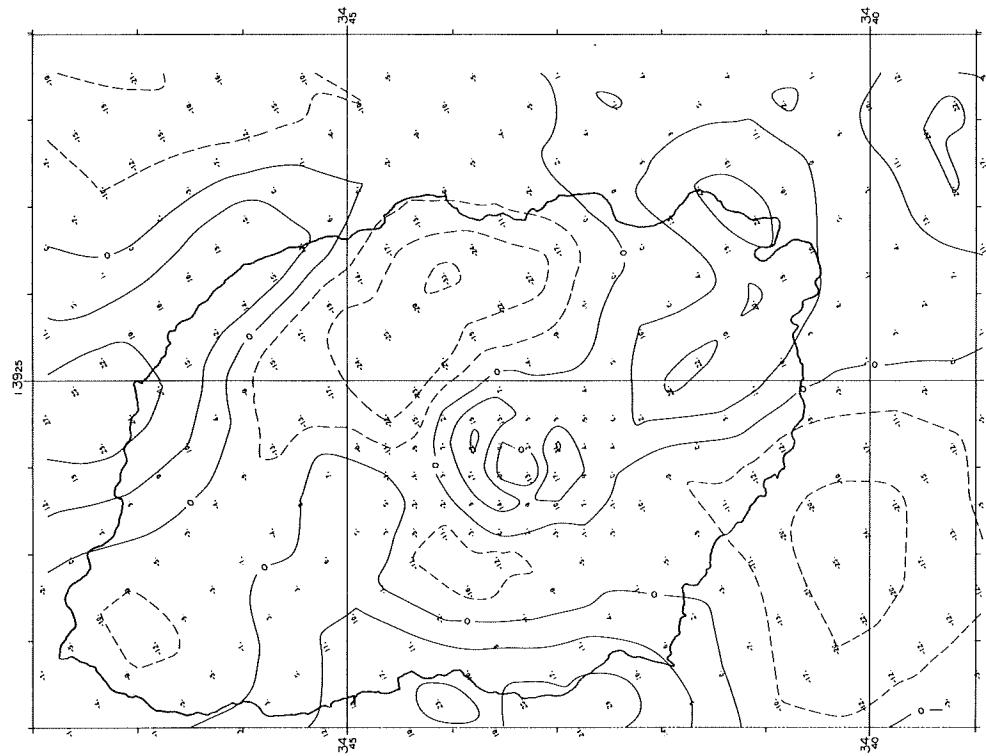


Figure 6 (c) Calculated anomaly field

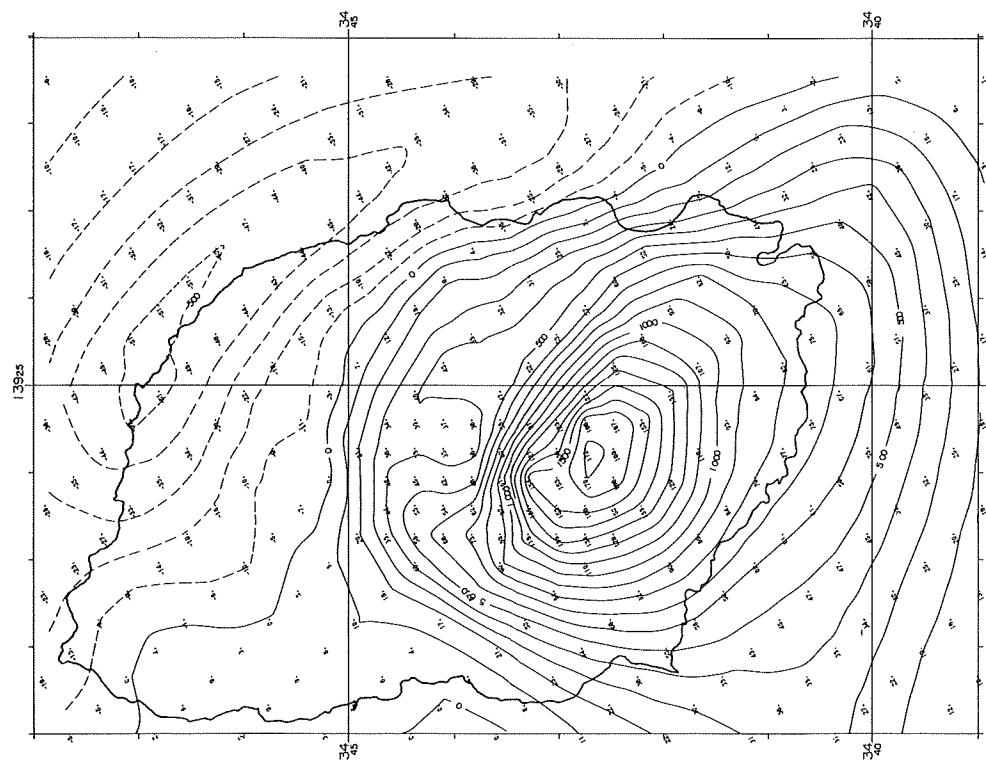


Figure 6 (d) Residual, which is obtained by (d)-(c)

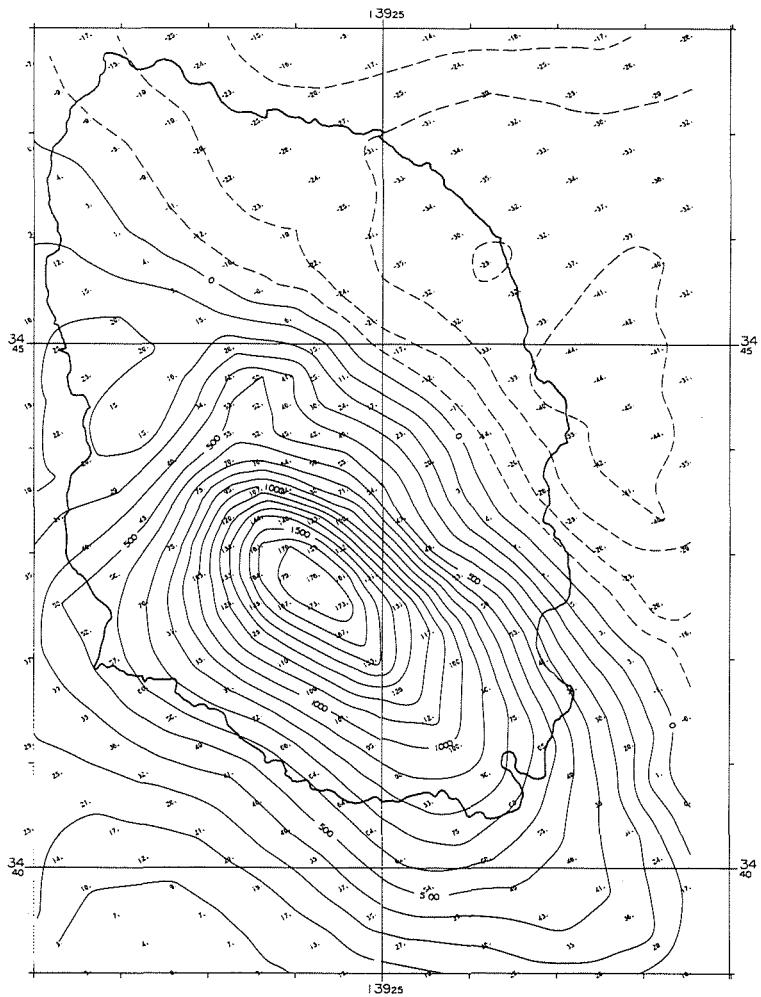


Figure 7 Results of three dimensional analysis on upward continued anomaly at 6000ft as shown in model 7 in Table 2.

(a) Upward continued magnetic anomaly at 6000ft, whose source field is shown in Fig. 5 (b)

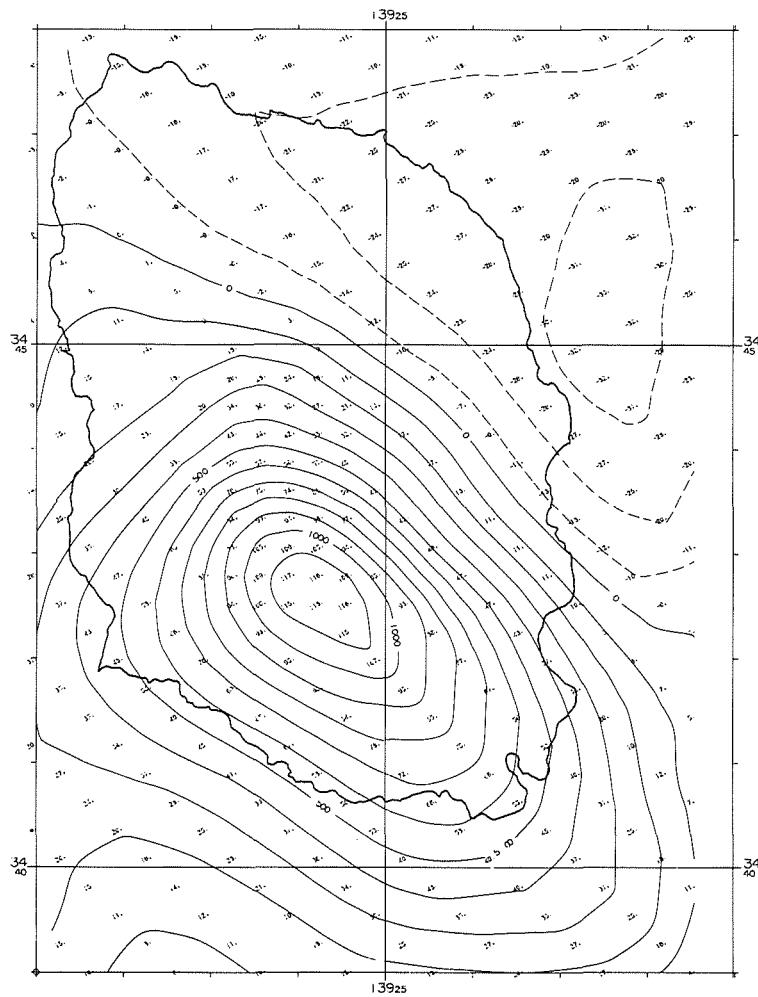


Figure 7 (b) Input anomaly field

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER
VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

223

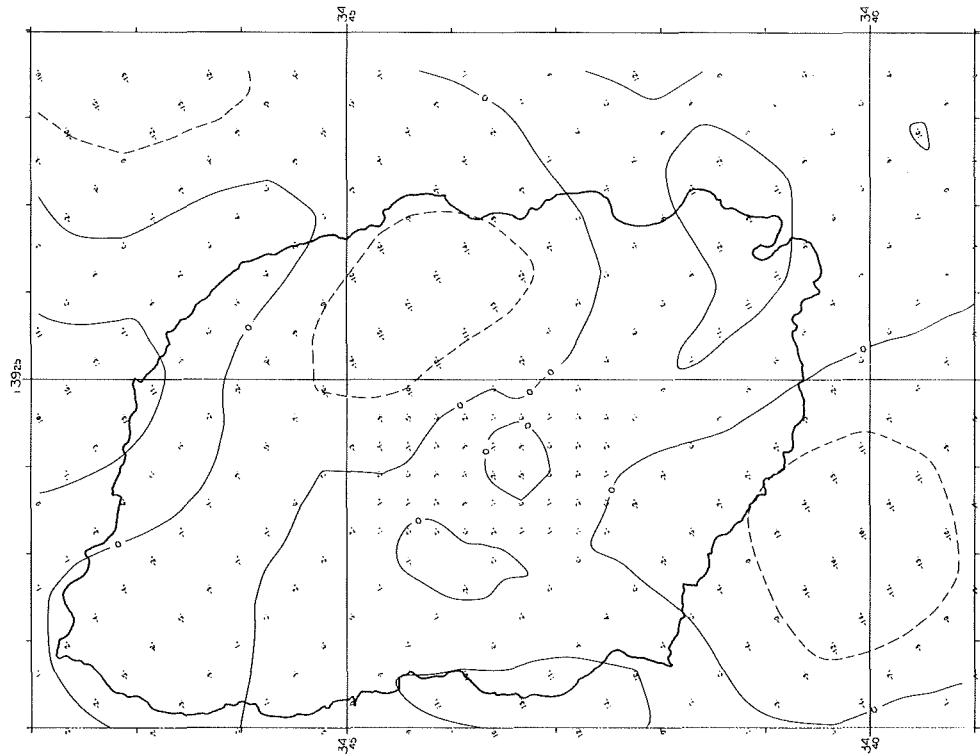


Figure 7 (d) Residual, which is obtained by (b)-(c)

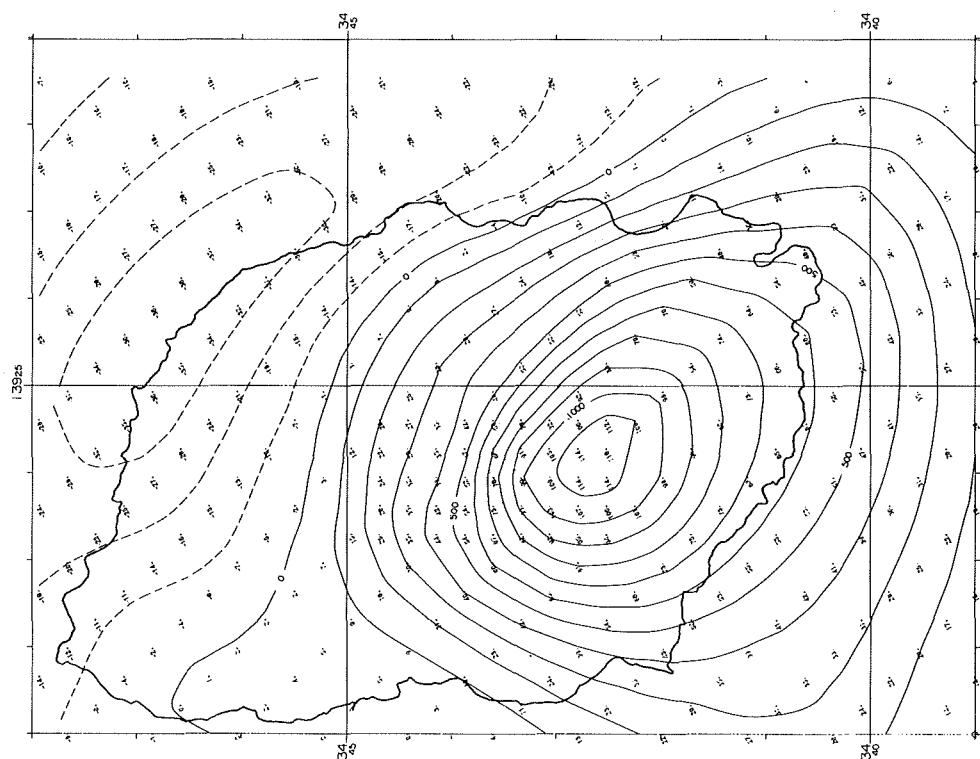


Figure 7 (c) Calculated anomaly field

3000ft の場合と比べ、4000ft, 6000ft の解析結果では、Goodness 指数も大きくなり、解析精度が向上していることがわかる。また、大島基盤の磁化強度、磁化方向の誤差範囲 (SDm, SDa) も減少しており、大島基盤に関しては高度6000ft の解析結果（第2表モデル7）が最も信頼度が高いと考えられる。一方、三原山の磁化については、逆に高度が上昇するにつれて推定値の誤差が大きくなる。これは、高度が上昇するに伴い、三原山山体による短波長磁気異常が減衰し、逆に、大島基盤の磁気異常が強調されるためで、三原山の解析結果については、高度3000ft の解析結果の方がより信頼度が高いと言えよう。以上の解析結果を総合すると、伊豆大島山体基盤の磁化は、 $|J|=12.80\text{ A/m}$, $\text{Dec}=18.9^\circ$, $\text{Inc}=56.5^\circ$ 、三原山のそれは、 $|J|=6.70\text{ A/m}$, $\text{Dec}=2.8^\circ$, $\text{Inc}=65.9^\circ$ となる。

3-2 伊豆大島の火山活動と地磁気変化

(1) 1986年12月の測量結果と1964年9月の測量結果との比較

水路部では1964年9月に上部マントル計画の一環として、伊豆大島の航空磁気測量を実施しており、そのときの結果が Utashiro et al (1972) によりまとめられている。伊豆大島は1964年以降、'74年当時に小噴火の活動が観測されているが、それ以後、今回の噴火に至るまでの間は、比較的静穏であった。伊豆大島では、1968年から西岸の野増観測所でプロトン磁力計による毎分値観測が実施されており、その結果によると、野増では1968年から1980年まで $-1.8\text{ nT}/\text{年}$ の異常な全磁力の減少が継続していたことが明らかにされている（行式ほか、1978, 1985）。また、1980年末頃からは、三原山南麓に設置されたプロトン磁力計の全磁力値が $-6.5\text{ nT}/\text{年}$ の異常な減少を噴火直前まで継続していたことが知られており、(Yukutake et al., 1987)，今回の噴火活動の長期的前兆現象と考えられている。

第8図(a)は、今回の12月5日、17日の測量結果をもとに作成した全磁力図で、(b)は1964年の測量結果をもとに、プロッターで描画した全磁力等值線図である。それぞれの作成過程では、測線上に沿う全磁力値をもとに250m 間隔のメッシュデータを作成し、それをもとにプロッターで等值線を描画している。第8図(c)は、両者の差 ($V_{1986} - V_{1964}$) を示したもので、三原山の北側付近を中心に 1000 nT 以上に達する全磁力の減少域が認められる。'64年当時の全磁力図では、三原山の北側に凸状になって正異常域が伸びているのに対し、今回の測量結果では、その凸状の部分が消失している。磁気異常の減少域は今回の噴火におけるB火口の位置と良く一致している。一方、地質調査所では1978年9月に高度3500ft における大島の全磁力測量を実施しており、噴火後の測量結果 ('86年11月29日、30日に実施)との比較を発表している（中塚、ほか、1987）。この結果では、第8図(c)に示したような 1000 nT 以上の減少は認められないとのことである。このことから判断すると、第8図(c)に示した全磁力の減少は1964年9月から1978年9月までの16年間の間に生じたことになる。残念ながら、このような変化量を地上観測でモニターしたものはなく、今回の地磁気変化量の妥当性については、今後さらに検討を加えて行きたい。

火山活動に伴う地磁気変化を議論する場合には、その変化が可逆的なものかどうか、さらには、噴火後の地磁気変化の経緯等についてもひきつづき監視する必要がある。その意味でも、今回の測量により、伊豆大島上空3000ft において精密な磁気図が作成でき、大島の磁気データベースが確立できたことの意義は重要であろう。今後は、今回の成果をもとに、大島の火山活動に伴う地磁気変化について、ひきつづき検討を加えるとともに、実際の測量を実施し、その変化の検出に努めたいと考えている。

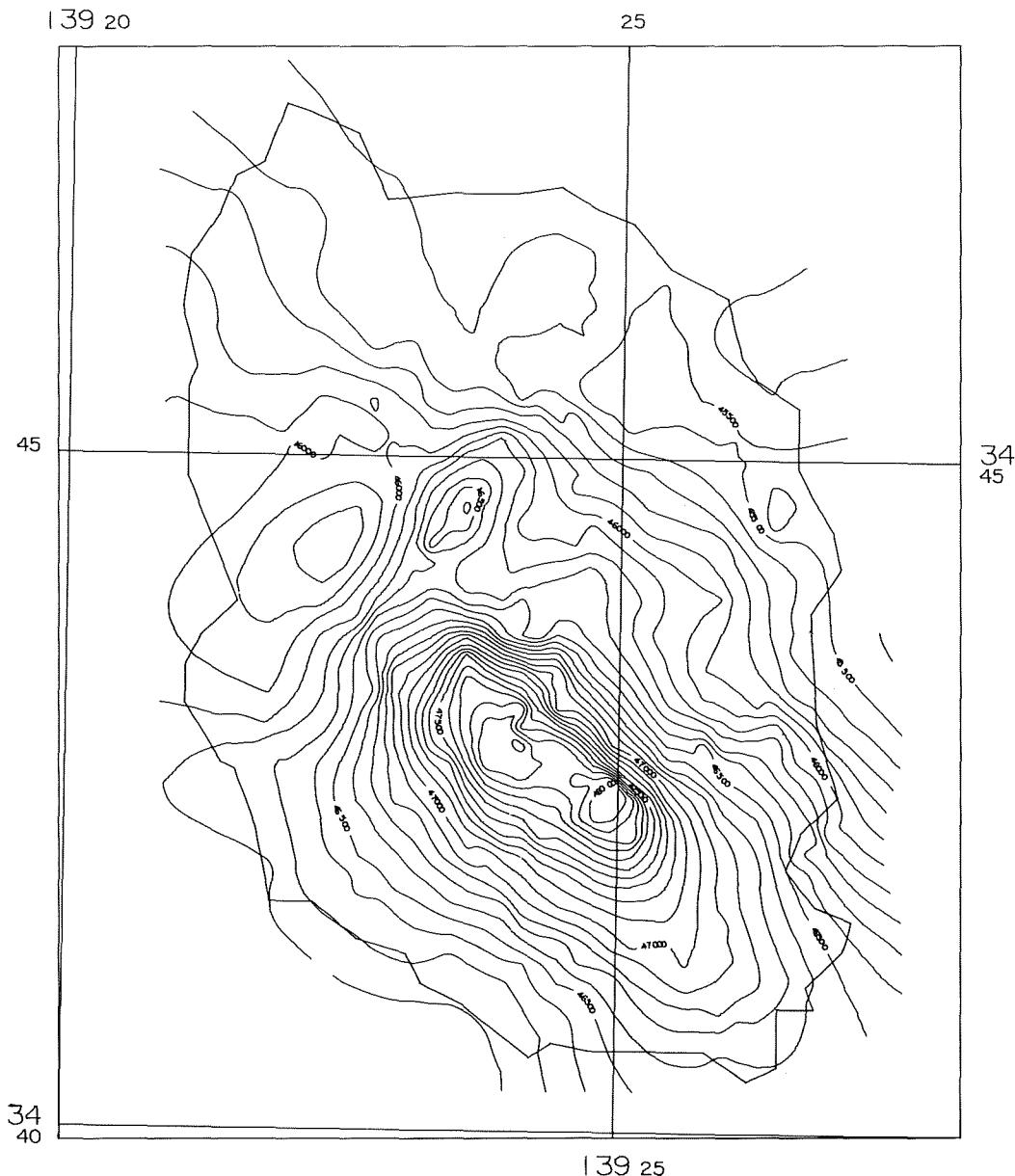


Figure 8 „Comparision of total magnetic force over Osima island at 3000ft between two sources, one was surveyed on Dec 5 and Dec 17, 1986 and the other was surveyed in Sept 1964.

(a) Total magnetic force compiled magnetic survey data in Dec, 1986.

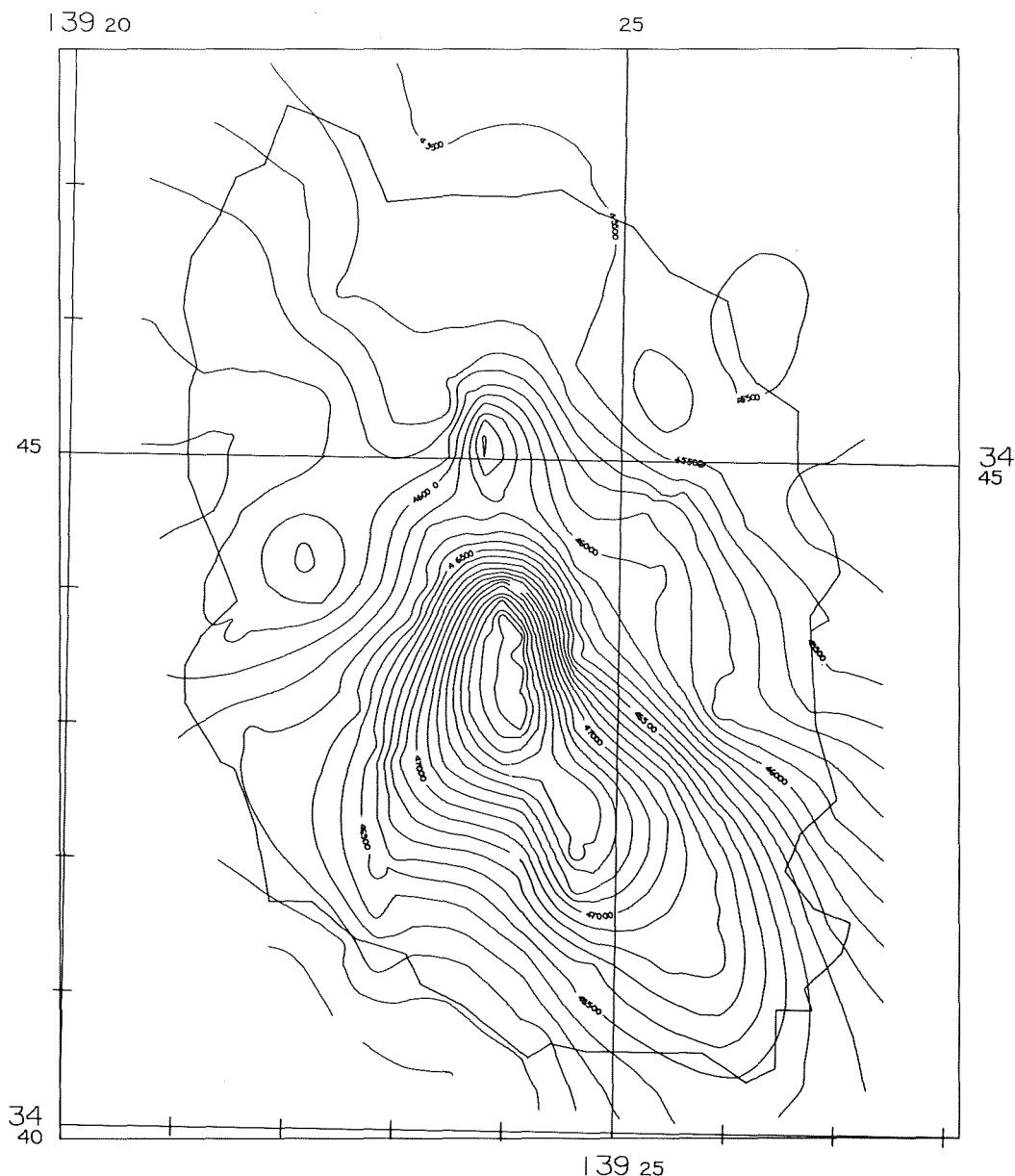


Figure 8 (b) Total magnetic force compiled from magnetic survey data in Sept, 1964.

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER
VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

227

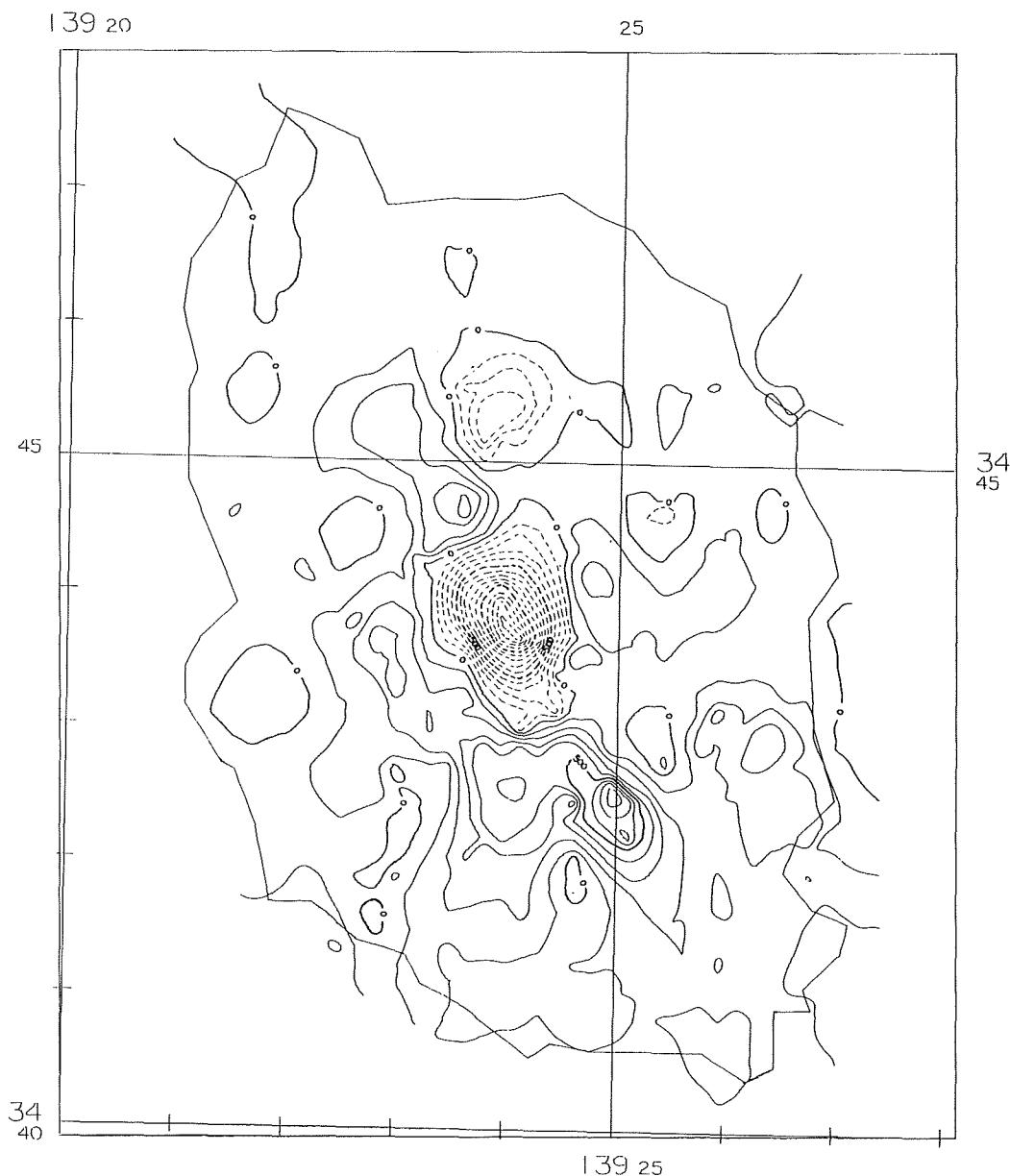


Figure 8 (c) Change of total force calculated by (a)-(b).

(2) 1986年伊豆大島噴火後の地磁気変化量の推定

伊豆大島の噴火後における地磁気変化の推移を求めるため、第8図(b)に示した全磁力図をベースにして、12月24日以降の各照査線における航空磁気測量結果との比較を行った。火山活動に伴う地磁気変化を議論する場合、①変化量の大きさとその分布域、②地磁気変化が検出された場合には、その後の地磁気変化の推移を、時間的経過とともに明らかにすること、の2点が重要である。今回の航空機による照査線上の地磁気のくり返し測定は、このような目的に向けた一つの試みである。

第9図は'86年12月24日と'87年1月19日の照査線の位置を全磁力図上に示したものである。

高度3000ftの測量では、三原山山頂からわずか150m余りしか離れておらず、第3回目以降の測量では再噴火の可能性もあるため火口直上を飛行する測線は設定できなかった。しかし、3回目、4回目(第1表)の照査線は、三原山北側のカルデラ内を横断しており、山体内部で大規模な磁気的構造変化があれば、十分検出できるものと考えられる。

第9図(b)~(f)には、各照査線における全磁力の比較結果を示した。図中A測線は'86年12月24日、B測線は'87年1月19日の測線である。このような照査線での地磁気変化を検出しようとする場合には、航空機の測位誤差が重要な要素となる。そのため、有限の測位誤差の場合に、どの程度の地磁気変化が見かけ上生じるかを検討する必要がある。ここでは、第9図に示した大島上空の全磁力図をもとに、測位誤差50mの場合に予想される地磁気比較誤差量を計算した。作成方法は200mメッシュのデータを作成し、各グリッド点での最大水平勾配を求め、それに測位誤差を累ねることにより求めた。その結果が第10図である。この図によると三原山の南側から二子山へとつづく高異常帯に沿っては、急な磁気勾配を反映して比較誤差は100nT以上に達する。また、三原山山頂北側にも100nT以上に及ぶ比較誤差の大きい領域が認められる。測位誤差が100mであれば、ここで示した比較誤差も2倍となる。各照査線での比較結果では、概ね100~150nT以内の範囲で全磁力値が一致しており、測位誤差による比較誤差の範囲内に収まる。のことから、少なくとも、噴火後から'87年1月中旬頃では、顕著な地磁気変化はなかったものと推定される。

(3) 地磁気変化量のモデル計算

伊豆大島のような玄武岩質の火山では、山体の平均磁化は $|J|=0.012\text{emu/cc}$ にも達する。また、タルワニ法で解析した残差分布図(第5図(e))によれば、カルデラ床付近は周囲よりもさらに磁化が大きいものと推定される。このような火山ではマグマの上昇に伴い、山体内部の熱消磁過程が進行し、これに伴う地磁気変化が予想される。ここでは、マグマの貫入に伴う地磁気変化量について2、3の場合についてモデル計算を行った。これらの結果は、今回の伊豆大島噴火活動期間中の山体内部の物理的状態の変化を推定するうえで重要であろう。

① 火道部分の熱消磁による地磁気変化

第11図は、火道を一辺300mの4角柱で近似し、その部分が熱消磁した場合の地磁気変化の計算結果である。このモデルでは、山体の平均的磁化を $|J|=0.01\text{emu/cc}$ 、磁化方向はDec=0°、Inc=47°と仮定した。また、火道の形成は、磁化した山体部分にマグマが貫入したものと仮定している。(A)また、測量高度は海面上915mと仮定した。この結果によると、マグマが測量高度から215mの距離まで上昇した場合、火口の南側では地磁気全磁力は約870nT減少する。また、北側では逆に300nT程増加する。 $|J|=0.014\text{emu/cc}$ の場合では、減少値は1200nT弱の値となり、第8図に示した地磁気変化量とほぼ同じ程度の減少量となる。しかし、この場合でも、マグマの上面が海面上300m付近まで上昇した場合でも、その変化量は100nT程度の減少にすぎない。このような変化がもともと磁気異常の平坦な場所で発生すれば、飛行機によるくり返し測量でも検

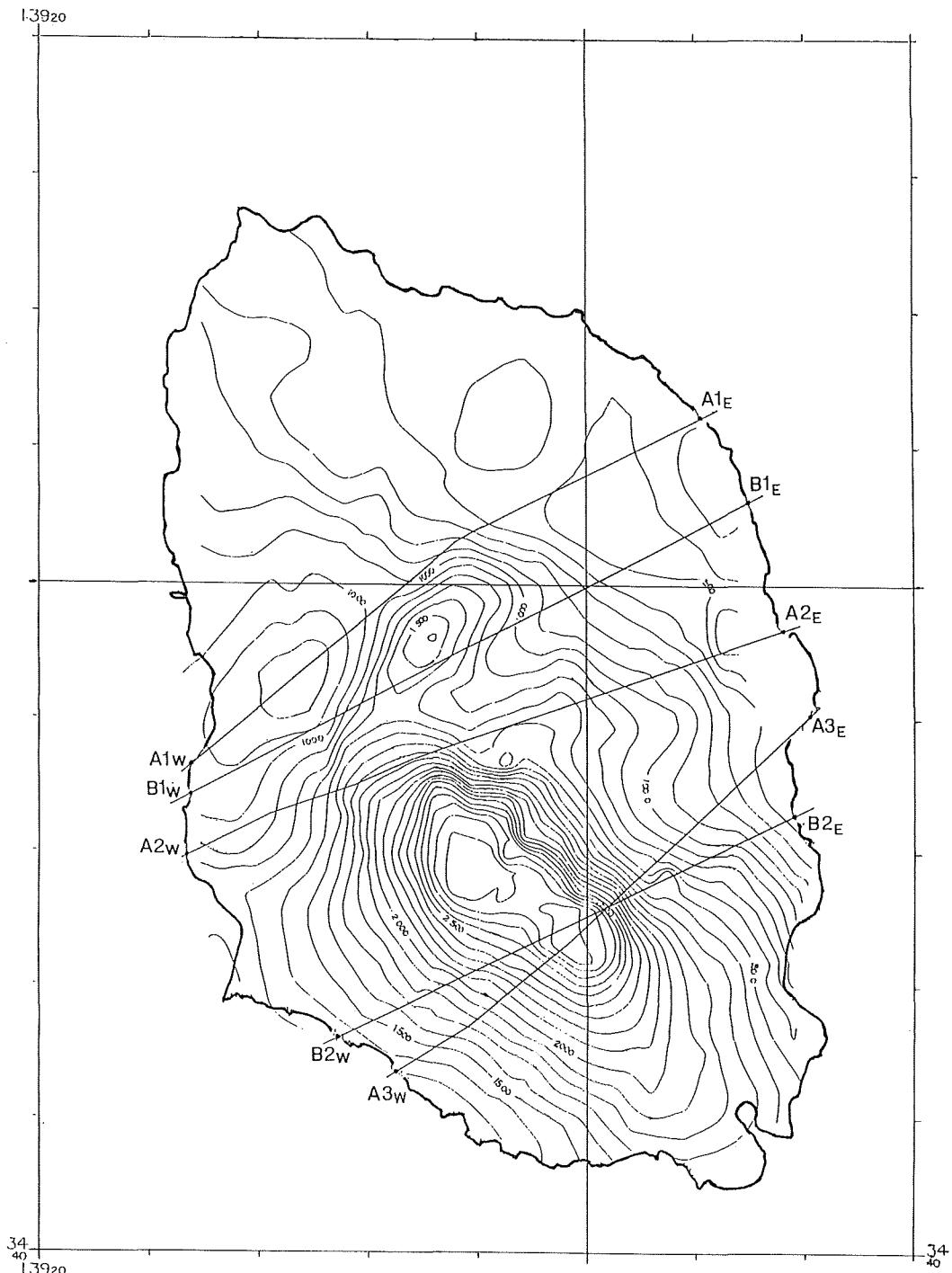


Figure 9 Magnetic survey along reference flight course from Dec 24, 1986 to Jan 19, 1987.

(a) Reference flight courses are shown on total magnetic map at 3000ft derived from survey data of Dec 5, Dec 17, 1986, which is used as reference total field in comparison as shown in (b) to (f).

(1) 照査測線 A1 W-E (1986年12月24日測量) における全磁力値の比較結果

点線： 12月 5日，17日の全磁力等価線の値
 実線： 12月24日の測量結果

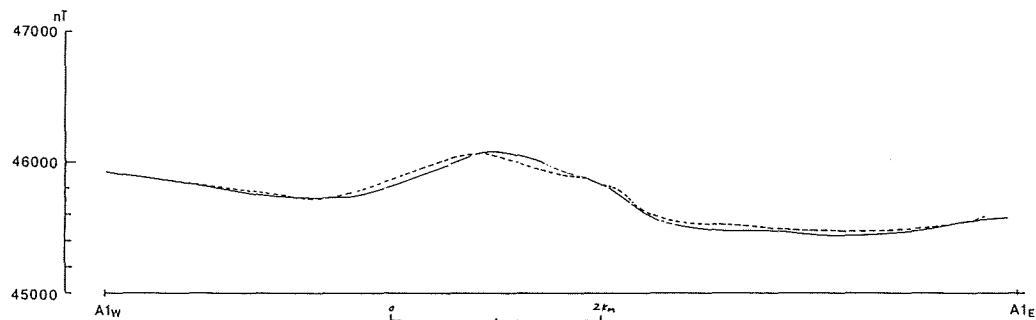


Figure 9 (b) Magnetic deflection along reference flight courses.

(2) 照査測線 A2 W-E (1986 年12月24日測量) における全磁力値の比較結果

点線： 12月 5日，17日の全磁力等価線の値
 実線： 12月24日の測量結果

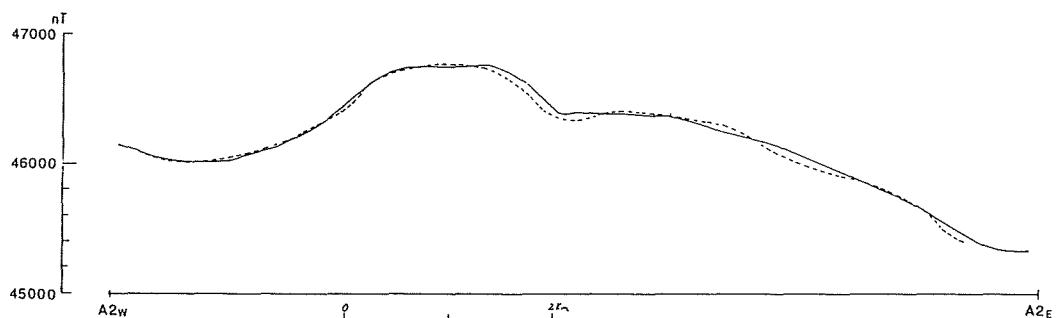


Figure 9 (c) Magnetic deflection along reference flight courses.

(3) 照査測線 A3 W-E (1986年12月24日測量) における全磁力値の比較結果

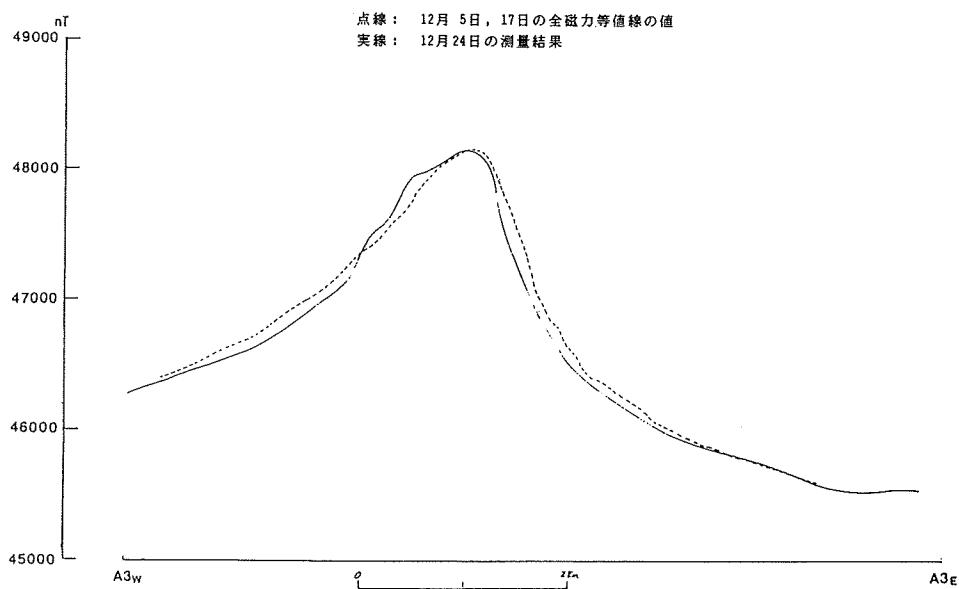


Figure 9 (d) Magnetic deflection along reference flight courses.

(4) 照査測線 B1 W-E (1987年 1月19日測量) における全磁力値の比較結果

点線： 12月 5日， 17日の全磁力等値線の値
実線： 1月 19日の測量結果

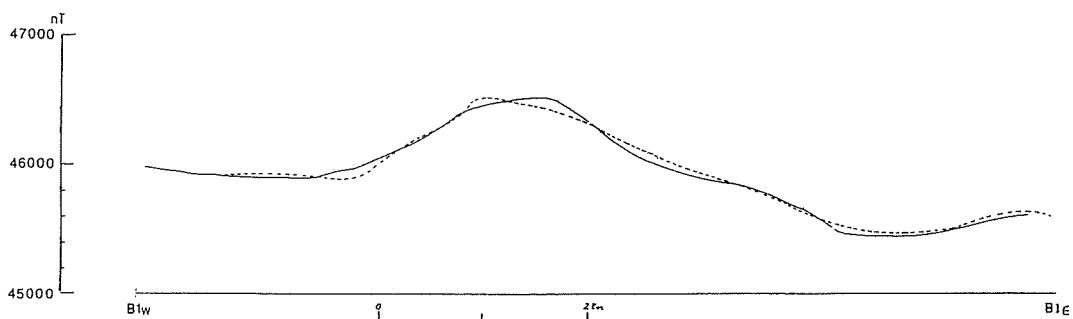


Figure 9 (e) Magnetic deflection along reference flight courses.

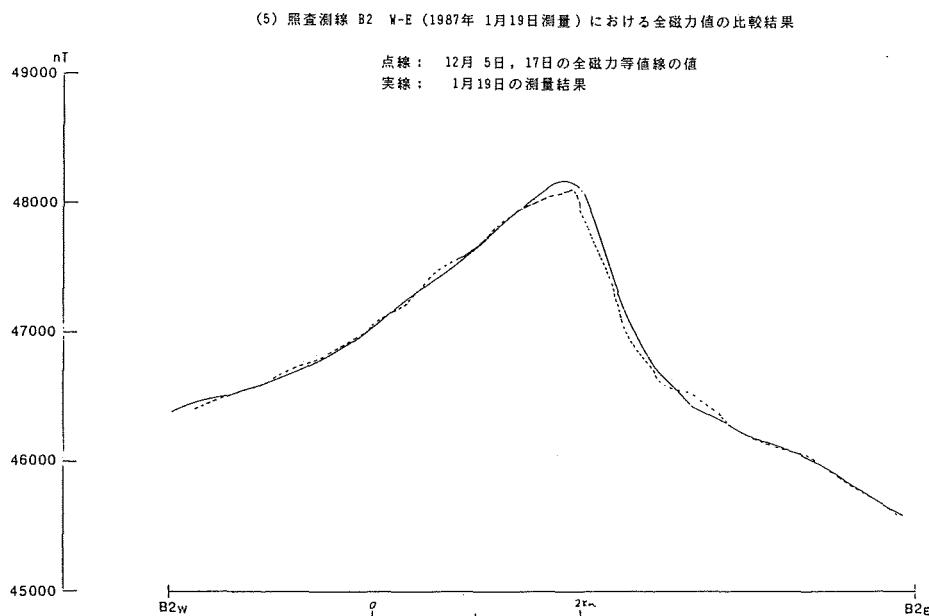


Figure 9 (f) Magnetic deference along reference flight courses.

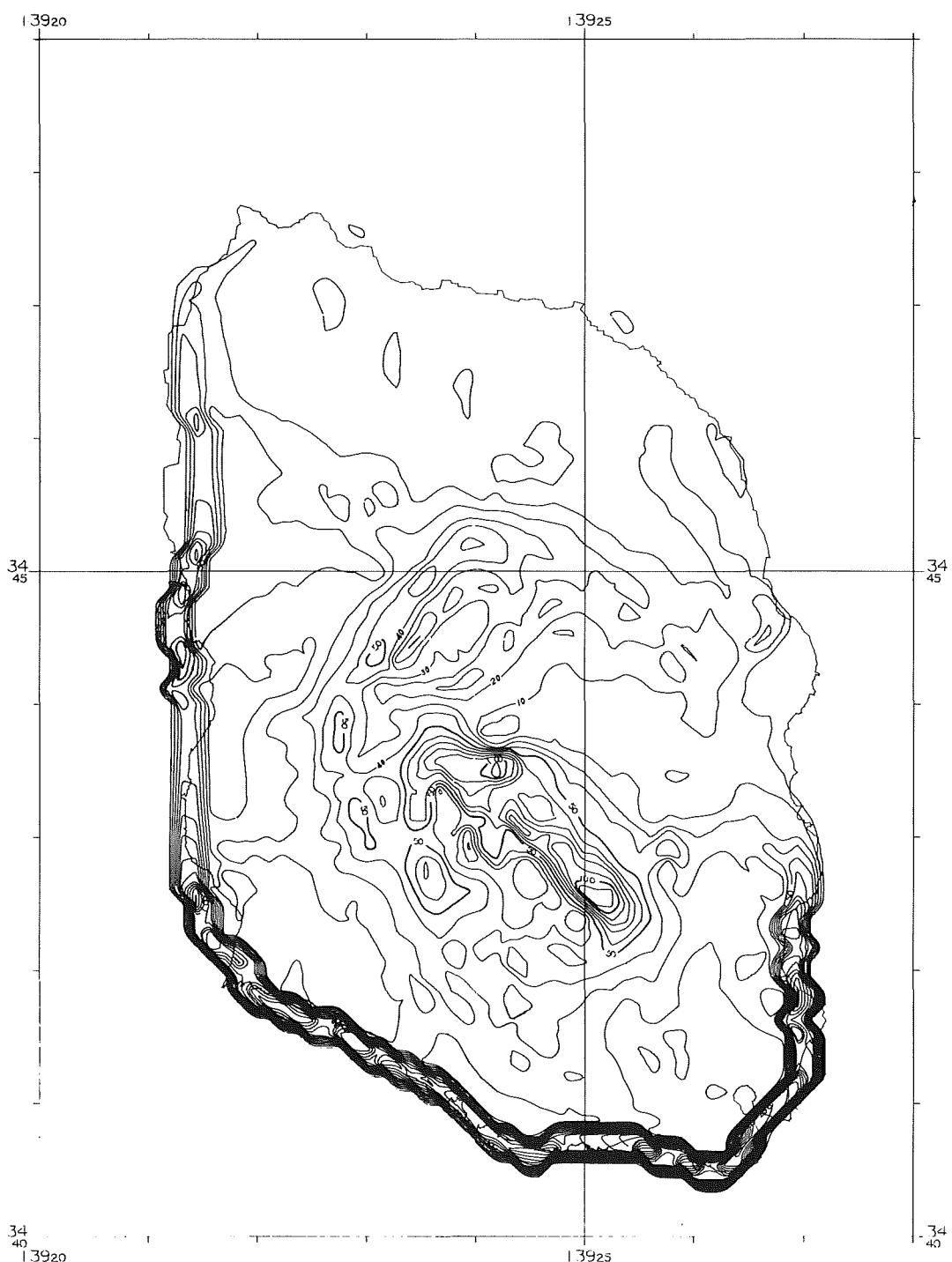


Figure 10 Estimated cross deference of total force under positioning error of 50m.

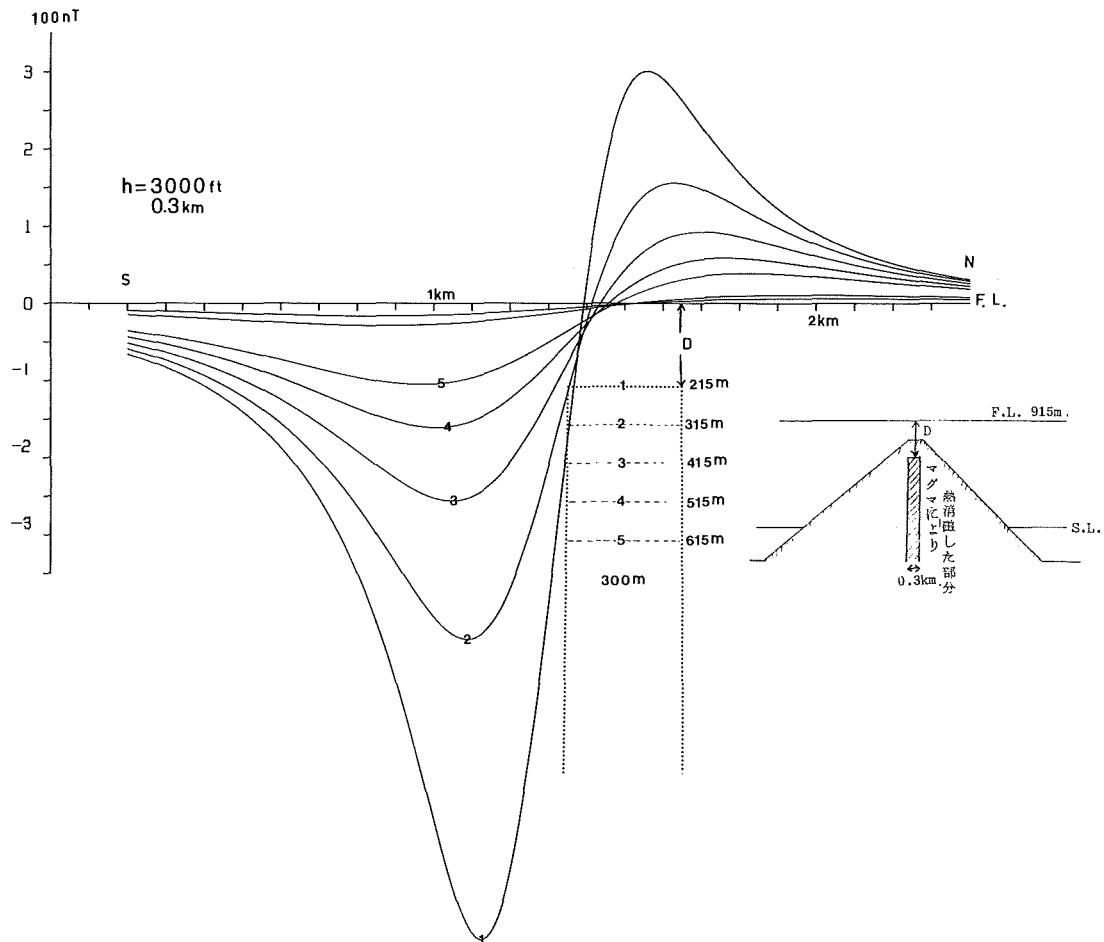


Figure 11 Magnetic change caused by demagnetization of prism shaped body. Horizontal length of prism is $300\text{m} \times 300\text{m}$. Assumed magnetization is $|J|=10 \text{ A/m}$, Dec=0, Inc=47.

出できると思われるが、磁気異常の急峻な場所であれば、その検出は第10図の比較結果で示したように非常に困難であろう。しかし、飛行機の利点は、このような変化を陸上の場合のように点としてではなく、面的にとらえることができるところにある。航空機による地磁気のくり返し測量は、火山体内部の熱的状態の変化を把握するうえで重要な情報を我々に提供してくれるものであり、今後とも実施する必要があろう。特に、大島の場合には、火口底高度が低下した場合に、地磁気がどのように変化するかが、非常に興味の持たれる点である。

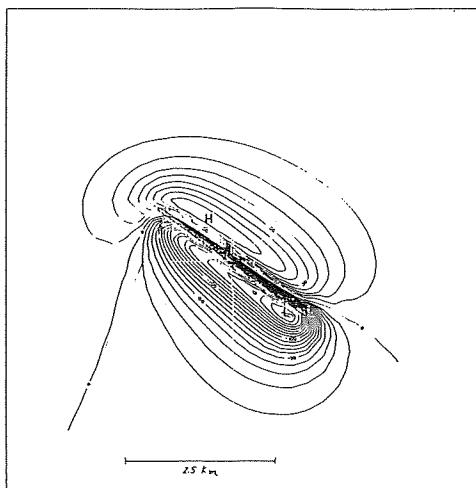
② ダイク状のマグマの貫入に伴う地磁気変化

'86年11月21日の大島噴火では、安永噴火以来の側噴火が外輪山を切って発生した。このときの噴火によりC₁からC₁₂の火口列が生じた。このような線状割れ目噴火に伴う地磁気変化量を推定するため、例として、一辺3km、上面深度300m、下面深度1200m、走向方向の長さ3km、周囲の平均磁化 $|J|=0.01\text{emu/cc}$ とし、その貫入岩体の幅が50m、20m、10mの場合について熱消磁に伴う地磁気変化量を計算した。その結果を第12図に示した。幅50mのダイクでは、振幅にして約250nT、幅20mでは約80nT、幅10mでは40nTの変化が、それぞれ予想される。

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER
VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

235

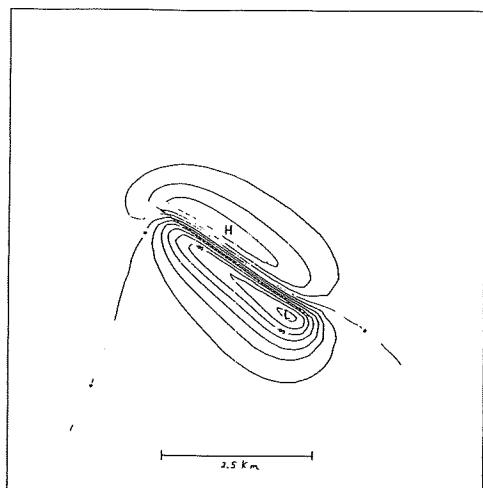
MAGNETIC ANOMALY--CALCULATED VALUE



FIELD VECTOR DIP= 47.20 DEC= -5.50
POLARIZED VECTOR DIP= 47.20 DEC= -5.50 J= -0.0100
TOP AND BOTTOM TOP= 0.300 KM BOTTOM= 1.200 KM
HORIZONTAL DIMENSION 3.000 KM X 0.000 KM

(1) 幅50M，長さ3000M

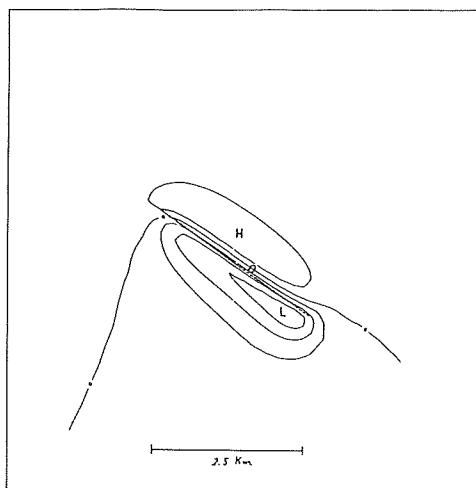
MAGNETIC ANOMALY--CALCULATED VALUE



FIELD VECTOR DIP= 47.20 DEC= -5.50
POLARIZED VECTOR DIP= 47.20 DEC= -5.50 J= -0.0100
TOP AND BOTTOM TOP= 0.300 KM BOTTOM= 1.200 KM
HORIZONTAL DIMENSION 3.000 KM X 0.000 KM

(2) 幅20M，長さ3000M

MAGNETIC ANOMALY--CALCULATED VALUE



FIELD VECTOR DIP= 47.20 DEC= -5.50
POLARIZED VECTOR DIP= 47.20 DEC= -5.50 J= -0.0100
TOP AND BOTTOM TOP= 0.300 KM BOTTOM= 1.200 KM
HORIZONTAL DIMENSION 3.000 KM X 0.010 KM

(3) 幅10M，長さ3000M

Figure 12 Magnetic change caused by demagnetization of tabular body.

一方、今回の噴火に伴う地殻変動の結果からも、複数の貫入ダイクモデルが出されている。それらのうちの代表的なものとして、中村（1987）や多田、橋本（1987）があげられる。前者では、走向方向の長さ20km、深さ数km、幅1m、後者では、走向方向の長さ15km、深さ10km、幅2mである。マグマの貫入に伴う熱消磁の部分は熱の伝導効果により、このような地殻変動から推定される幅と比べ、若干厚くなると予想されるが、大きく見積もったとしても幅20m以上の部分が、貫入に伴い熱消磁の影響を受けることは考え難い。それ故、ダイク貫入に伴う地磁気変化量としては、幅10m～20mのモデル計算結果に、より以上の量を期待することはむずかしい。このような貫入マグマに伴う地磁気変化量を検出するには、飛行高度をより低くすることが一つの手段であるが、現行のYS-11型機では危険が伴う。この意味で、もう少し小回りのきくヘリコプター等を使用することも今後は検討する必要がある。

3-3 航空磁気測量のまとめ

昭和61年伊豆大島噴火を契機に、昭和61年12月5日から昭和62年3月19日にかけ、のべ7回にわたり同島の航空磁気測量を実施した。その結果、高度3000ftでの伊豆大島の精密磁気図を作成することができた。この成果は、今後の同島の火山体内部構造や、噴火に伴う地磁気変化等の研究にとって不可欠かつ重要な基礎的科学資料となるだろう。

本論文では、今回の測量結果をもとに作成された大島の磁気異常の特徴を述べるとともに、3次元タルワニの方法を用いた解析結果を紹介した。また、1964年当時の測量結果との比較、噴火後の地磁気変化量の判定結果、等についても、いくつかのモデル計算結果を合わせて若干の考察を行った。これらを要約すると下記のとおりである。

- ① 大島の磁気異常は、山体地形に伴う異常と、NW-SE方向に延びる2次元構造を有する磁気基盤の影響が重疊したものである。
- ② 大島山体の平均的磁化は $|J|=12\text{A/m}$ 、三原山のそれは $|J|=6\text{ A/m}$ となり、三原山の磁化は平均的値の約半分となる。また、カルデラ床内には熔岩層によるとみられる強磁化層の存在が推定される。
- ③ 今回（'86年12月測量）の測量結果と1964年9月の測量結果を単純比較した結果では、三原山火口北側付近で最大1000nT以上の全磁力の減少域が認められる。
- ④ 噴火後に実施した高度3000ftの照査線での測量結果によると、12月5日、17日の時点から1月20日に至る間の地磁気変化には有意な変化が認められなかった。

4. 島内移動観測

4-1 GSI型磁気儀による偏角・伏角の観測

観測点は、C火口のほぼ延長上に位置する測候所(SO)、二子山(FU)と三原山東方の裏砂漠(UR)の3点で、いずれも伊豆大島火山観測所の全磁力測点の近傍である(第13図)。各測点ではGSI型磁気儀とプロトン磁力計による絶対観測を5対回実施し、その平均値を求めた。また、真方位は太陽の任意時観測法によった。なお、測点FUにおける後期の観測は、付近が工事中のため実施できなかった。各測点における絶対観測の結果並びに、八丈を基準にして求めた測点SOとURにおける前期、後期間の変化量(後期-前期)を第3表に示した。磁気儀再設置の場合は高さが問題となるが、測点での鉛直磁気勾配はSOが10nT/m、URが15nT/mであり、第3表の変化量は磁気儀設置に伴う誤差量よりも一桁近く大きい。しかし、外部磁場変化補正量のバラツキを考慮に入れれば、これらの変化が火山活動に伴うものかどうかは明瞭ではない。

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER
VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

237

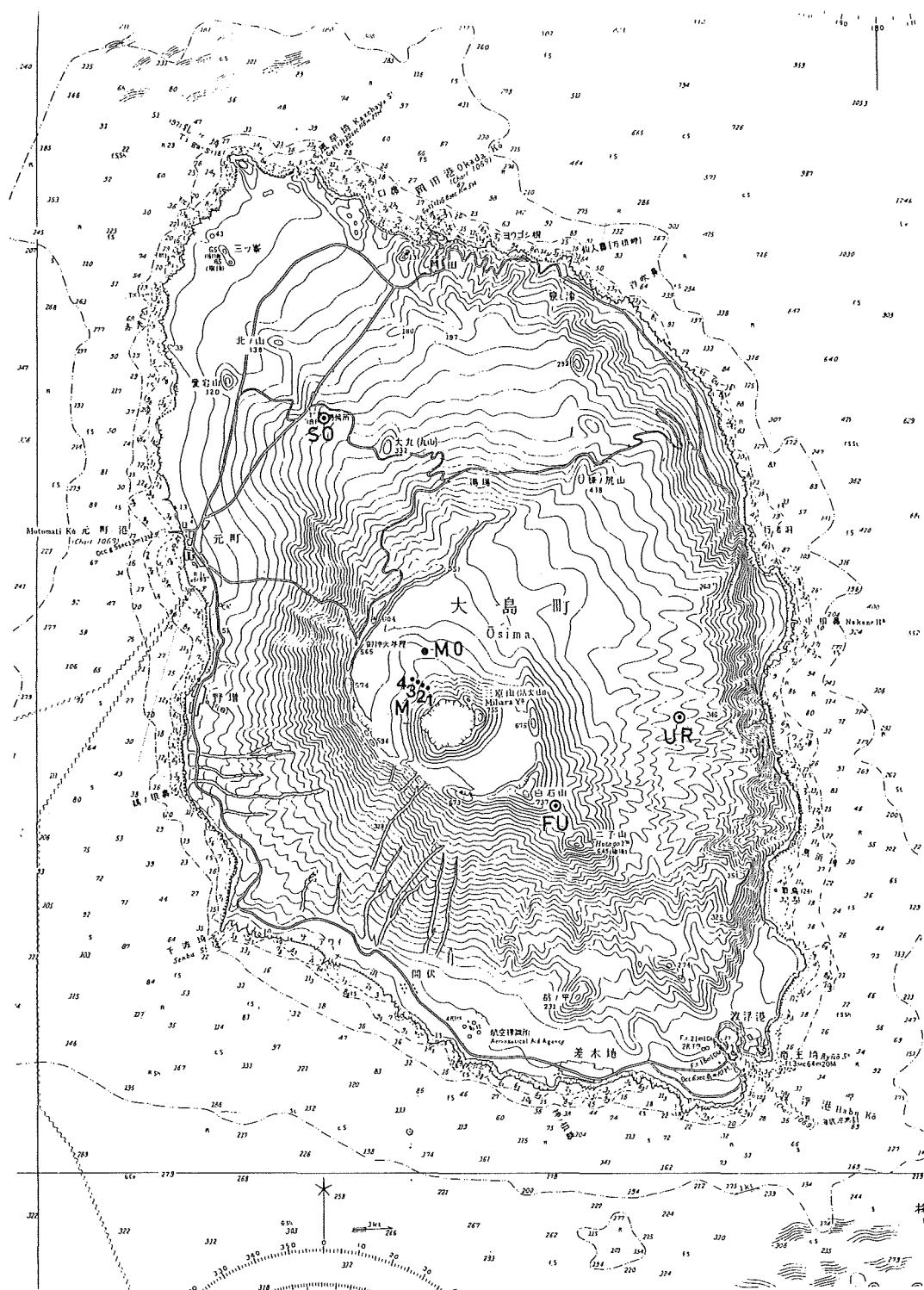


Figure 13 Distribution of land magnetic observation points.

Table 3 Results of land magnetic observation of vector component field.

測点	月日 時刻	D	I	H	Z	F
S O (測候所)	1 ³⁰ 16 12	-7° 07.3'	49° 05.4'	29725 nT	34304 nT	45391 nT
	3 ³ 14 56	-7 08.5	49 04.6	29737	34302	45397
八丈を基準とした変化量の差		0.3	0.5	4	-4	-2
U R (裏砂漠)	2 ⁰¹ 11 41	-7 33.9	49 30.4	29120	34104	44845
	3 ⁵ 11 33	-7 36.1	49 31.8	29089	34094	44817
八丈を基準とした変化量の差		0.6	1.3	15	-4	7
F U (二子山)	1 ³⁰ 11 23	-7 50.0	51 18.4	29468	36790	47137

島内における地磁気観測は1950年の噴火後にも力武、横山等によって実施されている。第4表は今回の測得値とこれらの値とを比較したものである。表中1953年の値は各測点の観測値より等值線図を作成してこれにもとづいて補間した。また、1956年については図より直接読み取った。地上での観測値は局地的な磁気異常の影響を受けるため、このような単純な補間では相当の誤差が含まれると予想される。また第4表下段には参考のため、柿岡における1953年、1956年から1986年までの変化量を示した。比較の結果、伏角はいずれも大きく増加しており、特にFUでは、その変化量は+4°にも達する。偏角はURで減少傾向がみられるが、他の2点では変化がないように見える。第14図は、これらの各測点における変化量をベクトル表示したものである。変化量としては、FUが最大で、UR, SOの順となる。解釈については、帯磁の減少、増加のそれぞれの場合について可能であるが、FUの変化については、その北側の山体内部が消磁したと考えた方が妥当であろう。プロトン磁力計の小型、軽量化に伴って、地磁気観測ではもっぱらプロトン磁力計が使用されるようになっていているが、地磁気変化ベクトルを求めるには、やはりGSI型磁気儀による観測が不可欠であり、両者を併用した観測方法が重要であろう。

Table 4 Change of magnetic vector component derived from comparision with contour map compiled by Yokoyama, I (1954).

測点	I			D			H			Z		
	1953 Mar, Aug	1987 Jan, Mar	△ I 1987-1953	1956.0 Jan, Mar	1987 1987-1956	△ D 1987-1956	1956.0 Jan, Mar	1987 1987-1956	△ H 1987-1956	1956.0 Jan, Mar	1987 1987-1956	△ Z 1987-1956
S O	48° 10' 49° 05.0' 1° 00'			6° 50' 7° 07.9' 0° 20'			29600 nT	29731 nT	100 nT	33700 nT	34303 nT	600 nT
U R	48 10 49 31.1 1 20			8 0 7 35.0 -0 30			29500	29105	-400	35200	34099	-1100
F U	47 20 51 18.4 4 00			7 30 7 50.0 0 20			32000	29468	-2500	35700	36790	1100
K A K		-0 13.4			0 19.1			33				-164

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER
VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

239

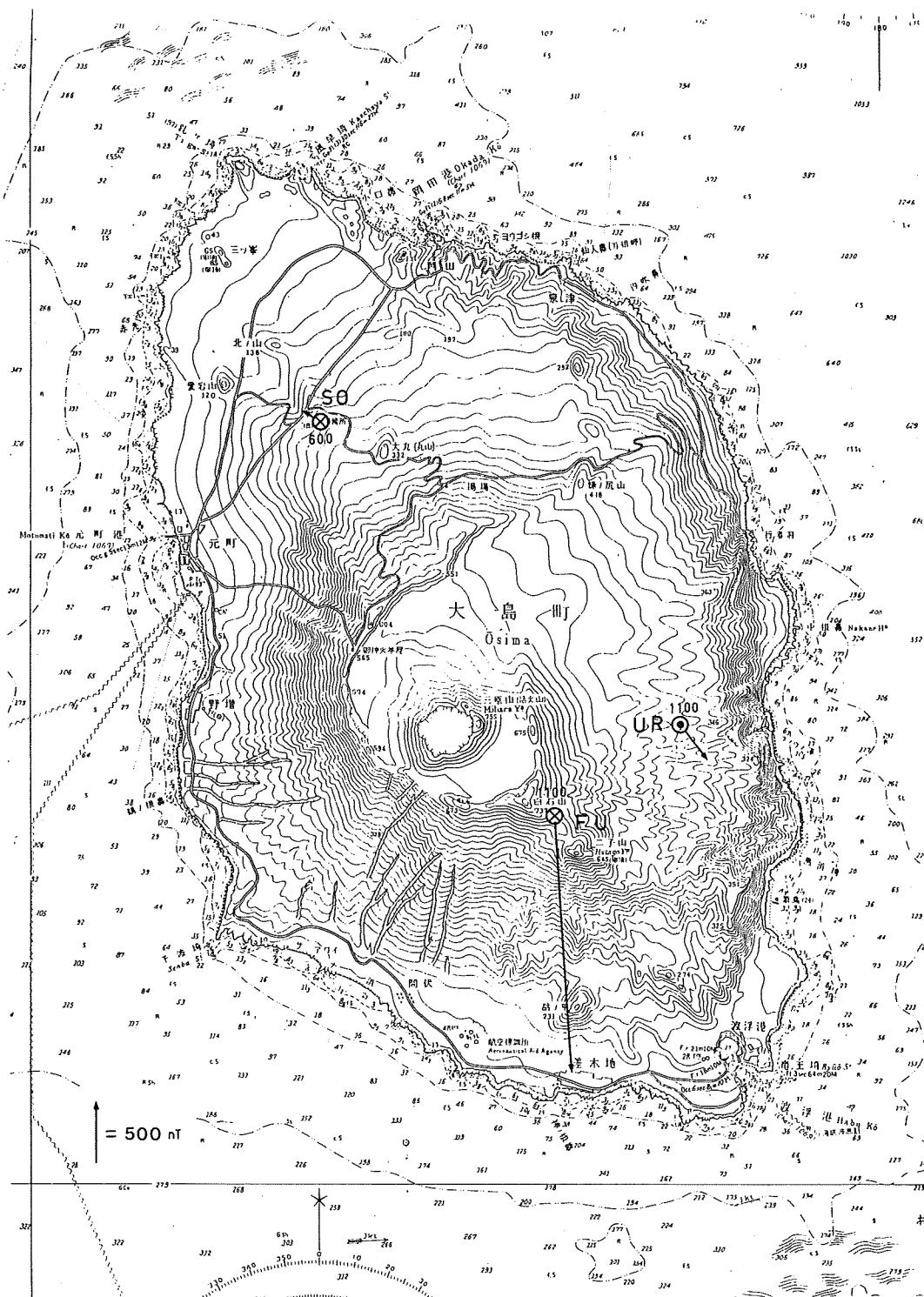


Figure 14 Magnetic change in vector component at three stations.

4-2 全磁力観測結果

三原山北北西約1kmの地点(MO)及び三原山火口西北西の斜面に約100m間隔で設けた4点(M 1～M 4)において全磁力の測定を行った。測点の位置を第13図、測定結果を第5表に示した。測点はいずれも新旧の熔岩流を避けた安定した観測データが得られる位置を選定し、測点MOには標石を、M 1～M 4には木杭を設置した。MOでは標石上1.93mの位置に検出器を固定し、10秒間隔で測定した。野増との差は前期が-18.3nT、後期が-19.2nTで、その差は0.9nTであり、この間に特に顕著な全磁力変化がなかったと考えられる。なお、MOにおける水平磁気勾配は最大70nT/mである。測点M 1～M 4についてはプロトン磁力計検出器を地表より1.98mの高さに設置し、10秒毎に測定し安定したデータの平均値を求めた(第5表)。測点が斜面であることと、支持棒の長さによる検出器高の制約もあって、測点の磁気勾配はMOに比べ大きく、最大で水平方向210nT/m、鉛直方向140nT/mである。後期はプロトン磁力計の故障により測定できなかった。今後の観測では検出器設置上の問題から数+nTの誤差が生じることが予想される。しかし、これらの利点は火口に近いところから、火口底の低下やマグマの消長による地磁気変化が検出が可能と考えられる。今後の移動観測での再測結果に興味が持たれる。

Table 5 Results of land magnetic measurement by proton precession magnetometer at stations from MO to M4.

測点	月	日	時	刻	F	F 野増	F - F 野増
M O	1	29	15	24	45949.1	45967.4	-18.3
	3	5	14	50	45960.8	45980.0	-19.2
M 1	1	31	13	50	44410	45987	-1577
M 2	//		14	45	47124	45982	1142
M 3	//		14	59	48406	45979	2427
M 4	//		15	18	45556	45977	-421

4-3 島内移動観測のまとめ

水路部では航空磁気測量を補足するため、昭和62年の1月下旬と3月上旬の2回にわたって大島島内における3測点(測候所、二子山、裏砂漠)において偏角・伏角・全磁力の測定を実施した。また、カルデラ内においては標石を設置(MO測点)するとともにMO~M4の5測点において全磁力測定を行った。なおM1~M4については機器のトラブルが発生し、後期の全磁力測定が実施できなかった。

前期、後期の観測結果の比較では、カルデラ内のMO測点も含めその間には大きな地磁気変化は検出できなかった。また、約30年前の資料との比較から、測候所(SO)、二子山(FU)、裏砂漠(UR)における地磁気変化ベクトルを求めた。これによれば、二子山での変化が最も大きく、H成分の減少(約2000nT)、鉛直成分の増加(+1000nT)が認められる。ただし、比較においては旧資料の等値線にもとづき行ったので、相当の誤差が含まれていると考えられる。火山の地磁気移動観測ではプロトン磁力計の観測が主に実施されているが、各測点の地磁気変化ベクトルを求めるにはやはりGSI型磁気儀等による偏角、伏角の測定が必要となる。今後はプロトン磁力計とともに、このような方向角の観測も併用することが火山活動の地磁気変化を議論する場合には必要であろう。

おわりに

伊豆大島の航空磁気測量の実施にあたり、終始、熱心な御協力をいただいた第3管区海上保安本部羽田航空基地の皆様に厚くお礼申し上げる。また、東京大学地震研究所、行武毅教授他、関係者の皆様、並びに、伊豆大島火山観測所、渡辺秀文所長ほかの皆様には、野増観測所の地磁気データの提供、島内移動観測の便宜等を図っていただいた、ここに記して深く感謝の意を表したい。また、島内移動観測に際し、協力いただいた伊豆大島航路標識事務所小滝所長ほかの方々に改めてお礼申し上げる。島内移動観測、並びに、航空磁気測量の実施にあたり前航法測地課長、杉本喜一郎氏及び、水路部大島章一大陸棚調査室長のご協力を得ました。記してここに改めてお礼申し上げる。

参考文献

- Kodama, K., Uyeda, S. 1978 : Magnetization of Izu Island with special reference to Oshima volcano, J. Volcanol. Geotherm. Res., 6, 353-373.
- 中村一明 1987 : 伊豆大島火山1986年噴火と広域応力場、伊豆大島火山1986年噴火 シンポジウム予稿集
- 中塚 正・大熊茂雄・牧野雅彦・金子 力 1987 : 伊豆大島火山1986年噴火前後の空中磁気異常、第81回地球電磁気地球惑星圈学会講演予稿集、122ページ
- Rikitake, T. 1951 : The distribution of magnetic dip in Ooshima (Oo-sima) Island and its change that accompanied the eruption of Volcano Mihara 1950, Bull. Earthquake Res. Inst., Univ. Tokyo, 29, 161-181.
- Rikitake, T. and Yokoyama, I. 1955 : Volcanic activity and changes in geomagnetism, J. Geophys. Res., 60, 165-172.
- 多田 執・橋本 学 1965 : 1986伊豆大島噴火と地殻変動、月刊地球, 97, 396-403ページ
- Talwani, M. 1965 : Computation with the help of a digital computer of magnetic anomaly caused by bodies of arbitrary shape. Geophysics, 30, 797--817.
- 植田義夫・登崎隆志・小野寺健英・兼子俊朗・大島章一 1983 : 航空磁気測量成果から求めた本邦第4紀火

山の地磁気異常と磁気構造, Rept. Hydro. Res.,18, 37-64ページ

- Utasiro, S.,Takigawa, U.,Osima, S. and Kondo, T. 1972 : Aeromagnetic and marine magnetic survery around Japan, Commemoration publication of the centeny of the Hydrographic Department of Japan, Tokyo, 75-111.
- Uyeda, S. 1961 : An interpretation of the transient geomagnetic variation accompanying the volcano Mihara, Oshima Island, Japan .,Bull. earthq. Res. Inst., 39, 579-591.
- Uyeda,S. and Richard, M. 1966 : Magnetization of four Pacific seamounts near the Japanese Islands, Bull. Earthq. Res. Inst., 44, 179-213.
- Vacquier, V., Uyeda, S. 1967 : Paleomagnetism of nine seamounts in the Western Pacific and of three volcanoes in Japan, Bull. Earthq. Res. Inst., 45, 815-848.
- Yokoyama, I. 1954 : Geonagnetic studies of Volcano Mihara, the 5th paper, Bull. Earthq. Res. Isnt, 32, 170-188.
- Yokoyama, I. 1957 : Geomagnetic anomaly on volcanoes with relation to their subterraneam structure, Bull. Earthq. Res. Inst., 35, 327-357.
- Yokoyama, I. 1969 : Anomalous changes in gemagnetic field on Oosima volcano related with its activit-
ies in the decade of 1950. J. Phys. Earth, 17, 69-76.
- 行武 毅・吉野登志男・大谷和美・大本栄次・下村高史・石川雄一 1978 : 伊豆大島における全磁力永年変化の異常, Bull. Earthq. Res. Inst. Vol 53, 881-892ページ
- Yukutake, T. et al., 1987 : Changes in the electrical resistivity of the central cone, Miharayama, of Izu-Oshima volcano, associated with its eruption in November, 1986. Proc. Japan Acad., 63, Ser. B.,55-58

Aeromagnetic Surveys (at 3000 ft)

(1) The first column of this table indicate
observed date as follows,

A : Dec 5, 1986

B : Dec 17, 1986

C : Dec 24, 1986

D : Jan 19, 1987

(2) Magnetic anomaly $\Delta F = F - \text{IGRF1985}$

MAGNETIC SURVEY ON IZU-OSIMA ISLAND AFTER
VOLCANIC ERUPTION IN NOV. 1986

267

LAT	LONG	F	ΔF	LAT	LONG	F	ΔF
°	'	°	'	°	'	°	'
D 34 48.7N	139 34.3E	45579	nT 32				
D 34 49.3N	139 34.2E	45565	12				
D 34 49.7N	139 34.2E	45551	-5				
D 34 50.1N	139 34.2E	45545	-15				
D 34 50.2N	139 34.2E	45548	-13				
D 34 50.6N	139 34.1E	45561	-4				
D 34 51.1N	139 34.0E	45571	0				
D 34 51.6N	139 34.0E	45572	-2				
D 34 52.1N	139 34.0E	45584	4				
D 34 52.5N	139 34.0E	45587	3				
D 34 53.0N	139 33.9E	45612	23				
D 34 53.5N	139 33.8E	45622	28				
D 34 53.9N	139 33.8E	45629	32				
D 34 54.5N	139 33.8E	45635	32				